



檜原神社付近の梅

春を告げる梅は黄梅
白梅、紅梅、しだれ梅へと続く
紅梅が吹き匂っていた
幹のわきに立って見上げると
空一面を染めた花と小枝から
芳香が降り注いでくる
複雑たる香 甘ったるい香
清純な香 すみきった香
その香りをなかだちに
心をかまし愛を語る
梅の季がいつしか桜に変わる
白・薄紅・紅
ひとひらふたひら相はなれて
春の光にただよう
風が花びらにそっと触れて行く

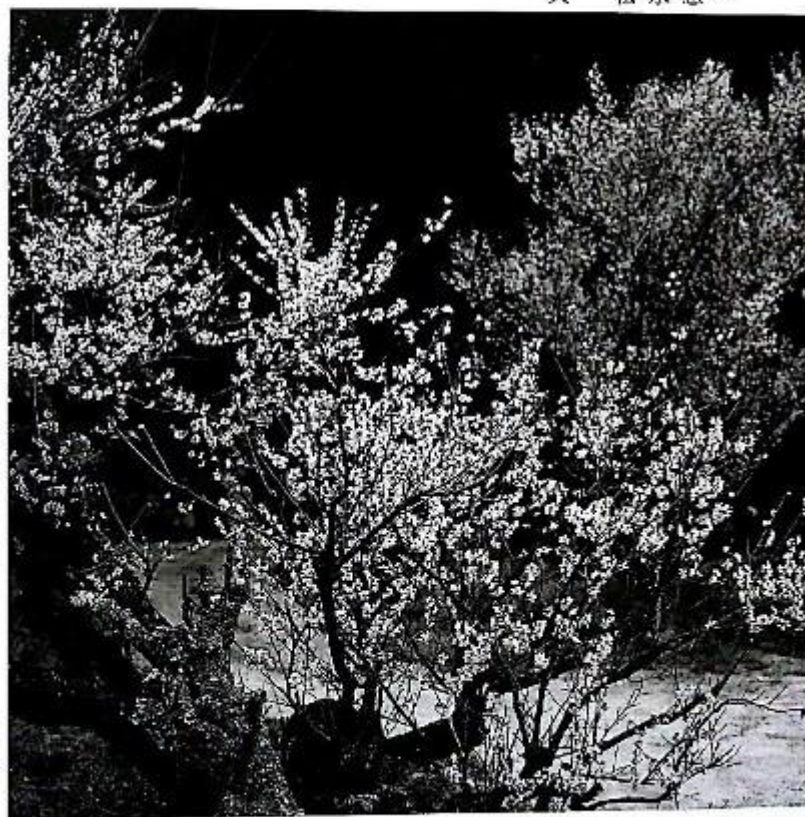


栗師寺遠望

Photo essay

春の訪れ

題字 中田 蘭石
撮影 由井 収
文 松 永 恵一

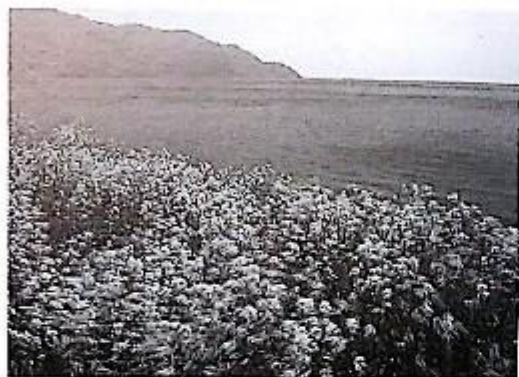


玄寶庵の梅林

季節の



座禅草



風渡る



春日和

実景

陽春

撮影 武市通治



春の粧い



桃花咲く



新雪の鞍掛尾根より鈴北岳をめざす (鈴鹿)

小林 実



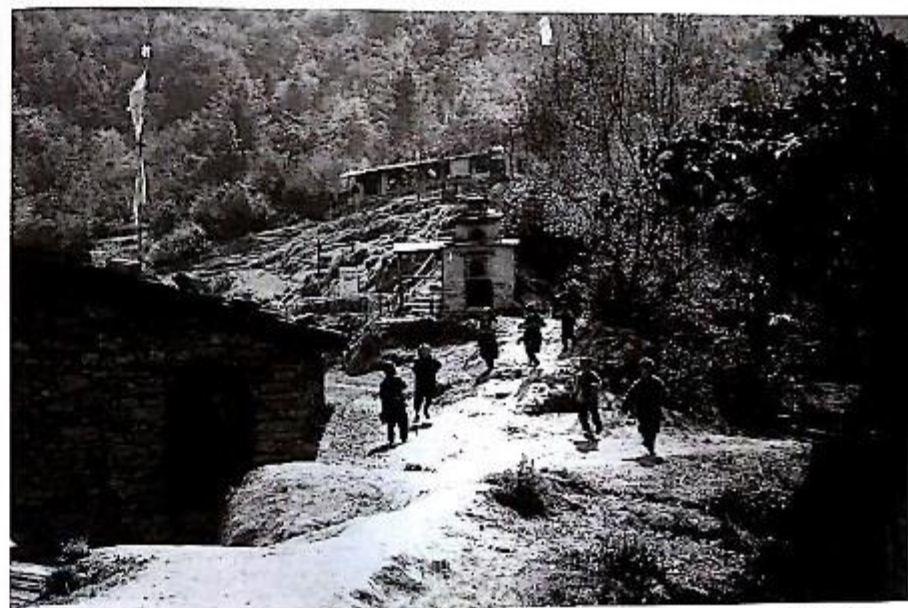
家並み (ネパール・ランタン谷シャブルにて)

吉沢 栄一



イブネ北端より雨乞岳 (鈴鹿)

梶原 計田



遊ぶ村の子たち (ネパール・ランタン谷シャブルにて)

吉沢 栄一

野の花点描 - 湖北 赤坂山・三国山にて -

奥田英一郎



カタクリ



イワカガミ



イカリソウ

別冊 関西の山
新伴 3・4月 開巻 第33号

●目次

表紙: 松田敏男「春洗き大峰、朝顔覚めて思いを馳せた夜の出来事」(大峰)

●作者プロフィール ●1948年、京都府生まれ。京都府立芸術大学卒。1967年より山岳活動。山岳部の部長を務めた。京都府立芸術大学、南アルプス山岳会、東京ギョウリイ(100号、他) 京都山と野に親しむ会代表、日本山岳会会員、一等三角測量協会会員

記事名	著者	頁数
● グラビア	春の訪れ……… 撮影 山井 収 文 松本 忠一 季節の実景(開巻)……… 武市 道治 遐想(山のエッセイ)……… 奥田英一郎 三月のわらじ……… 西塚 寿一 リーダーの諸問題……… 稲垣いつを	4 2
● 紀行	朝日山(一等三角点本点)……… 阪本 健治 唐笠山から行者山縦走……… 酒井 賢治 高野山・福ヶ岳・今淵ヶ岳……… 浅野 孝一 高野山・福ヶ岳・今淵ヶ岳……… 松田 敏男 上谷山・美濃俣丸……… 石 守康 庭戸山・黒尾山尾根から鏡子ヶ口……… 筒井 克治 近江側から登る諸羅の山々(伝説・伝承の紹介)(2) ① 真の谷で「源院の窟」を発見……… 岩野 明 ② 日本コハ羅川谷に幻の「豹ノ穴」を発見……… 50 ③ 筒井峠から黒谷山……… 48 ④ 明神山から白鹿寺山……… 46	17 14
● エリア別研究	京都北山やぶ濃き痛快山行記(30)最終回……… 京都北山グループ 桃山から沢山をのんびり歩き……… 出口 恵次 石上神宮から大団見山登山……… 中村 敏文	39
● 文学歴史探訪ハイク	河内軍兵の里を訪ねて……… 榎水 忠一	56
● コースガイド	① 明神山……… 山本 和夫 ② 百合ヶ岳(大所山)……… 金谷 昭 ③ ホンデン山から根来寺へ……… 塚本 昭彦 ④ 馬ノ崎屋山……… 柴田 昭彦	62 60
● 野の花点描(20)	病床から思いを込めて……… 市川正次朗 台湾の山々・五岳三尖へ(15)雪山……… 山形 敏之	70 38
● 連載	山の本紹介……… 新ハイキング山行録と頼山陽 山の本紹介……… 新ハイキング山行録と頼山陽 ハイキングガイド……… 新ハイキング山行録と頼山陽 ハイキングガイド……… 新ハイキング山行録と頼山陽	76 75 74 55
● 編集後記	編集後記……… 田村 賢俊	96 94 51

●巻頭言

「新ハイキング関西」の目指す山行スタイルは？ どのような方針で活動するのでしょうか、という質問をある場所で見ました。改めて問われてみると、返事に窮してしまいました。極端に言うと本格的な山岳を目指すアルピニストを養成していくのか、それともワイワイガヤガヤとみんなで楽しく山歩きをするだけの仲良し集団でよいのか、ということですが、いわば「新ハイキング関西」の活動理念です。

当会の「入会のおり」に「山歩きの楽しみを通じて知識を深め、情報ゆたかで健康な身体を作り、自然の中を歩く喜びを共に広めましょう」と理念らしきことを記しています。本意は、関西を中心にしたそこそこの山から遠征まで自然に融れながら健康で楽しい歩きをしましょう、ということですね。決してアルピニストを目指すものではありません。しかし、ただ楽しく歩ければ良いというものでもありません。会誌誌上で自然や山の知識を得、例えて読図力や判断力を養い、正しい山歩きのマナーを知り、確かな準備で安全にしっかりと歩いてほしいと思います。

新ハイキング関西(代表) 田村 賢俊



克

イタドリ

稲垣 いつそ

日本がまだ飽食列島でなかった頃、子どもの世界にも自給自足の丸かじりはもとより、大根・人参・栗・梅など、なんでもかんでも生のまま食べたものだ。よくもまあ、無事にここまで来たもんだ。物はさすがに味が立たなかつたが、イタドリはこちそうだった。

ここで、生イタドリの通の食し方を一つ。左の葉のくぼみに塩を少々。採りたてのイタドリを根を上にして右手に持つ。いくらなんでも皮までは食わぬ。えもの折りの端を軽く銜え、水浚をすすり上げる時の手のしぐさそのままに、口から鼻、鼻から目、目から頭上へと我が面を逆撫でする。これを二、二度

繰り返せば、とらばの皮はきれいに剥ける。あとは左の葉の塩をつけてはかじり、つけてはかじり、ただひたすらに食うばかり。しつこくも酸っぱい酸っぱい顔ばかり。太すぎず、長すぎず、きょうのイタドリは最高やうだ。早よ帰って夕飯のガシ（カサゴ）釣りに行く。

とまあ、つい数十年前の私の少年時代はこんなだった。イタドリは「虎杖」と書く。虎のまだらとイタドリのそれはよく似ている。なるほどと納得。しかしなぜ「杖」なのか。これがずっと疑問だった。それが先だつての那須ヶ原山への新ハイ登山で氷解した。

国道1号線鈴鹿峠の東麓、坂下の宿からの林道を取下時に向かった。リーダーは健脚で、大のO氏。しんがりの私はハイハイゼーゼー。これはしんどい杖が欲しい。しかし手頃なものはない。そこで何となく使ってみた

のが路傍のイタドリ。春光には生食可能な事も、山行した6月22日（出の今はみことな峠に成長して背丈は腰に2倍を越えている。とても手折れるものではない。ポケットナイフのノコギリで、ゴシゴシひいた切り口の直径は約3・5倍。イタドリのおがくすというものを初めて見た。

道草ばかりしているこんな私を、一行は坂下で笑って待っていてくれる。ほんに仲間がありがた。

それから那須ヶ原山までの登り1時間半、下り参道橋まで1時間15分、林道を坂下峠まで登り返して1時間。さらに坂下の駐車場まで1時間。これだけの間使っても大丈夫。特に縦方向の力に対してはびくともしないこのわか杖、なかなか結構な味でした。

ということと、軽年の疑問が、と解けはしたものの、わが家の



克

随想

(山のエッセイ)

三月のわらじ

神童子谷源流にて

奥田英一郎

深い雪の斜面を押し分けるようにくぐって行くと、突然崖っ

ガラククコーナーがまたまた狭くなつたという訳です。

⑩ これは学問的な考察ではありません。日本のイタドリと中国のそれを比較したのではなく、漢字が作られた当時の中国のイタドリがどんなだったかなど調べてみようと思つたのもありません。さらには、「杖」には「つえをつく」という意味以外に、昔、罪人を打つために使つた棧、さらにその刑罰そのものの意もあるということです。

ぶちに出て、目の前に大きく風景が広がった。雪におおわれた白い壁を真つ二つに切り裂くように、垂直に黒い一筋の岩肌が、水しぶきと共に落ちていた。

ジョレンの池である。岩肌の両側には水が流れて付いている。高さは40センチはあるだろう。池の中程のくびれたあたりには、5、6センチの青氷となってワイドに広がっている。滝壺に落ちた水が、雪崩のあとのテプリのようにならず高く盛り上がっている。

雪の上に腰を下ろして、テルモスの熱い紅茶を飲んだ。ひと汗かいた後に味わうレモンの酸味は、ふだん家で感じるほど強くはなかった。山稜はまだ厳しい冬の世界のようなが、明るい光に山肌はクリスタル色に輝いている。空気は冷たいが風はなく、日差しはやわらかでむしろ暖かいくらいである。ゆったりと小鳥の囀りなどを聴いていると、思わずまどろんでしま

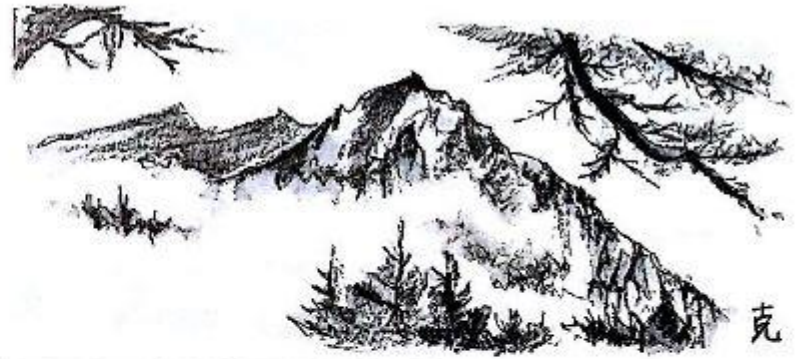
そうであった。

のんびりとしたひとときを過ごして腰をあげた。山と崖までは忠実にトレースをたどればよいのだが、雪だまりに落ち込んだり急斜面を滑りたりして、けっこう時間がかかった。時折カメラを構え、高みへ高みへと登って行く。

その時、すぐ前の樹の枝に使い古されたわらじが掛つてあるのを見た。わらじの上には雪が残り、垂れ下がった葉の先端には、解けた水滴が再び凍ってできた氷の玉が光っていた。

初夏から秋にかけて神童子谷を巡行しただけが、要もなくなつたわらじを枝に掛けておいたのだろう。一旦何の愛憎もないわらじだったが、無雑作に投げ捨てられなかったのだろう。このなにげない行為に、ふと「水掛明神」のことが思い起こされたのである。

—— 神の登り口で履き古した



克



克

随想 (山のエッセイ)

わらじを新しいものに履き替えた時、古いものを松の枝に掛けておくとき旅の疲れが出ない——とかいう民間信仰のことである。古いわらじの供養をすることで道中の安全を祈ったという、いわば遠い祖先の人たちのいとおしい習わしは、今も全国のおちらこちらの「古儀」という地名にその名残をとどめている。

神童子谷は美しい溪である。伐採のため樹根相もそこなわれ、深も荒れてしまったが、それでもまだ深い淵や姿のよい流などが昔のまま残っている。

ヘンツイさんと呼ばれる淵は、以前は深くて腰までも、どうかすると小柄な女性だと胸まで冷たい水に浸った。

赤銅の滝では、Yさんが滑で足をとられて放いだことがあったが、翌年今度はK嬢が全く同じところで落ち込んだりもした。釜淵は晩秋の頃、紅や黄の鮮やかな落ち葉が淵を埋め尽くし、

まるで錦の織物のようになり、その上を歩いて行きたいような衝動にかられたりもした。

かまにたり残された尺物の岩窟を見たが、釣り興がなくてなすすべもなくいまましい思いをしたこともあった。

今、立ち枯れの枝に掛けられた古いわらじを見て、自分たちの神童子谷でのいくつかのエピソードとともに、仲間と通行を無事に終え、ほっとした気持ちでわらじに感謝する優しい人たちの心根をみる思いがしたのである。

この大峰の山ふところ深くには今も、先人たちの奥ゆかしいごごみを引き継ぐ岳人がいるのだろうか。

リーダーの諸問題

西尾 寿一

リーダーとはどのような仕事

ところで「評価される立派なリーダー」というものがある。身の回りを見渡して見たとき理想的な管理職として評価されている人とはどんな人のだろうか。

例えば、部下に尊敬され、仕事ができ、上司の受けもよし、女性にも好かれる、とくれば、そんな人は一人もいないと答える人もあるに違いない。が、管理職というものは、そのような理想をもつか、上司から要求されているようにもみえる。

それはともかく、仮に、そのような理想のリーダーがいたとしよう。困難な山でも必ず先頭を行き、パーティの面割見もよく、だれ一人そのリーダーを批判する者もない、という完璧なリーダーである。このようなリーダーについて行けば成功間違いないはずなのに、それにもかかわらずかなりの失敗があるのはなぜなのだろうか。

小生の考えるところ、それはリーダーが立派すぎたのである。リーダーがパーティ各人が負担すべき仕事をその一身に引き受けた結果自滅したのである。そのメンバーはリーダーが全てをやってくれるものと甘えていたからである。

ここまで極端でなくても、このようなことは案外たくさん見受けられる。リーダーが偵察に出ている、残りのメンバーは世間話にうちまわっていたりする。ルート工作などはリーダーの仕事とばかり甘えきったパーティでは、少しむづかしい山となると山に追い返される。それでもなお、優秀で強力なリーダーであれば、登って無事帰ってこられるかも知れない。しかしそのようなリーダーを皆で拍手喝采しているだけでよいのだろうか。

仕事は、山であれ社会であれ、本来はその集団ごとの目標がある

をすすめる人なのだろうか。この当たりまえのように思われていることが実は大きな問題なのである。

リーダーとは特定の集団を統率し、守護し、目標とする対象に間違いなく向かって行けるよう導く人と考へるならば、一般社会におけるリーダーも、山岳やその他スポーツにおけるリーダーも特に区別をつける必要はないように思われる。

しかし山岳では生死にかかわる判断が要求される場合もある。山行リーダーの仕事の厳しさは突出している部分もあるかも知れない。

おそらく人命にかかわる判断は、単に一次的なものから、二次・三次的なもの、さらには機動的なものに至るまで、さまざまなかたで、状況の違いはあるものの、ほとんど全ての領域でかわってくるものと考えてもよいだろう。

これを改善するには、リーダーは手放きをすべきである。人の評価や人気などにこだわらずに、パーティ全員に仕事をさせるべきである。人を使うのもリーダーの仕事である。

ただ、このようにした場合、リーダーの人氣が落ち参加者も少なくなるかも知れない。しかしよいではないか。そのことによって陸の自覚が進み、事故の種が少なくなるのであれば。

『出雲風土記』の神名火山

朝日山(1等三角点本点)

山陰

阪本健治

神名火山(神名嶺・加南嶺)山とは、古来から大きな社が山腹に鎮座する山、あるいは神が鎮座する山自体が神体の山である。京都府福井郡田辺町の甘南嶺山、奈良県生駒郡斑鳩町の三笠山をはじめ、桜井市の三輪山など多くの神南嶺山がある。

なかでも『出雲風土記』に記された四つの中の神名火山の一つで双耳峰の朝日山は一等三角点の峰である。出雲大社から赤山へ、そして東に尾根を縦走して1等三角点の鼻高山に登った3年前の1月に、引き続き歩く予定だったが登り残した山であった。当分お預けと思っていたが意外と早くチャンスがおとされた。仲間と大山に登る前に、尾根らしを兼ねて行きがけの駄賃に登るこ

とができた。

朝日山へは穴道群の長江から辨木の金剛寺を経て登るのが表参道だが、今回は日本海側の悪霊の古浦道に登って成相寺へおられた。古浦までバスもあるが松江からタクシーで入る。海岸線の最西端30〜40分前方の木柱を指し、運転手白く「あれが口国自然歩道の入り口です」と。車を降り歩み寄ると、何とそれは「危険立ち入り禁止」の大柱で行き止まりだった。ふり返るとタクシーはUターンをして走り去った後、まさにあの終りである。

近くの家で自然歩道の入り口を尋ねるが悪領を得ない。あとで判ったことだが朝日寺への道と結びは問題がなかった。中国白

朝日山の1等三角点標石と眼下に古浦港



然歩道などというものは地元の人のとっては無縁の代物なのだ。

山の斜面を見上げると林道のガードレールが見えるので、何とかなるだろうと無謀のはずれから登り始めると、「右一畑 左大社」の古い道しるべが現れた。だが右への道はない。右に左にと集落の中の細い道を登って行くと林道に出た。すぐ右手一段下に神社がある。タクシーを降りた地点から30分ほどだった。しばらく林道を登って



二段重木の珍しい朝日寺境内の石塔

行くと、つづら折れの林道に白い相が見える。林道際に薄い踏み跡があるので危悪ですると丸太の階段道に預びだす。まさにもない自然歩道特有の道である。しばらくすると「自然歩道観察モデルコース」の標識

があった。

階段道からなだらかな山道になると眼下に古浦漁港、東方には鼻高山、西には鼻高山に次ぐ鼻根半島第一の高峰三坂山と澄水山・太山山などの松江北山が望まれる。

「朝日山へ0.4km」の道標を見ると、ほとんど成道の成相寺道が合流する。立派な万葉塔が現れると朝日寺の一角。参詣の人が登って来たのか、灯明が上がっていた。数分で西ノ峰の分岐点であった。

箱根下から上段に葉節如米、下段に地蔵尊の二段重木の石塔が連なり、西ノ峰分岐

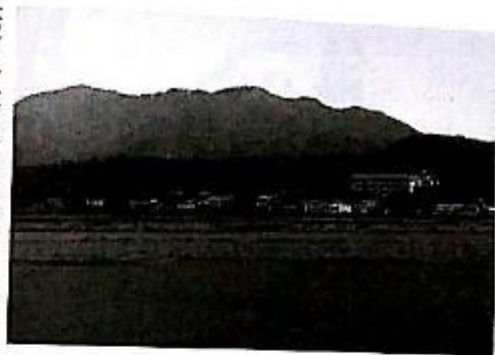


には二三番石塔。ゆるく登ると5分で五十番石塔の建つ西ノ峰だ。尾根道に自然歩道が経塚山へと分かれる。この経塚山を神名火山とする説を唱える者もいるようだ。

西ノ峰からはUターンするように支線をくだるが、ここにも石塔が連なり、箱根手前の土浦からの道を待つ様まで続いていた。跡踏歩道橋から箱根の更を回るように登ると休所舎があり、その一段上が341・831一等三角点標石のある朝日山山頂・東ノ峰である。『出雲風土記』の吹鹿郡の神名火山だ。東へ10分ほどのところに本志を示す八角形の天湖点があった。さらに踏み踏は一段下の標識アンテナへと続いていた。

土浦からの道はスキの植林帯がわずかでほとんどが自然林。頂上付近にはスタジアムが多く、この地方では珍しいアカガシの林もあるという。日本海、穴道湖と振り分け中津、瀬川平野、遠くかすかにあす登る予定の大山と、眺めは脅威ですっきりしないが、低い山とは思えないなかなかのものだ。

標標をくだると広い境内。手前左手に休憩舎があり、西ノ峰を背負って右手に神地年間に行基の関所といわれる真智寺大宮寺涙の金土山朝日寺の本堂。行基作といっ



古江付近から望む経塚山(左)と朝日山

本尊・十一面観世音菩薩をまつっている。奥には車庫がある。

朝日山の東麓にある佐太大神、今の佐太神社は式内の出雲二の宮である。佐太の「サタ」は因引き神話「狭田の国」ではないだろうか。陰暦の10月は神無月であるが、この佐太神社と出雲大社では神を迎える神在月。佐太神社は陰暦10月20、25日、出雲大社は11、17日に神在祭が行われる。佐太神社の古文書には朝日山を大神のご神体山

という記述もあるという。

さて朝日寺だが、天長年間(824-842)に弘法大師が訪れて中興の祖となり、今は出雲国観音堂(観音堂)の別当寺である。

神院(神宮)にはあらに朝日寺

摩打つ波を見るにつけても

この日も(朝報)5月1日(21日)前の節かなうちにお参りしたいと30人ほどの講の参拝者で賑わっていた。

本堂前の二百段の石段をくだっての表参道は経木を経て、長江に出る。舞木の踏切山金剛寺は平安時代創建の臨濟宗妙心寺派の古刹で、かつては十二坊もあったという。観音堂には藤原期に造られた柏一本遣りの馬頭観音像があり、所定の文化財になっている。出雲観音堂(三十三番札所)だ。石段下からは車道というので、葉枯木が残る成相寺道をつくた。朝日寺を出て、分岐まで戻り、刈り払われたばかりのササ道をくだって行くくと薄暗い竹林になり、ほどなく未舗装の林道になる。

古留志ダムを過ぎるあたりから雨が降り出した。ダムから15分ほどで高野山真盛宗の延林山道(延成相寺)。この寺を、行基が開祖で、かつて佐太大神の別当職として社務を支配し、佐太の奥ノ院といわれていた。

寺の背後の丘の上にあった延成寺社熊野権現が明治四年(1871)に廃社となった時、ご神体・神像(現在奥の文化財に指定されている)を寺に移し、神仏習合の寺院に改称する持ったという珍しいお寺であり、出雲観音堂(二十八番札所)になっていて、降り出した雨のせいかな参拝者もなくひっそりとしていた。

途中から雨も上がり、のんびりと香の花々を愛でながら里道をくだって、一畑電鉄朝日ヶ丘駅に出た。終点の松江(松江駅)近くまで朝日山と経塚山が手にとるようにそびえていた。

神名火山の山容の多くは笠型、または円錐型、いわゆるコニエである。集落に近い平野部にそびえる「端山」的性格がびつたりする山であった。

(平成8年4月19日歩く)

▲コースタイム▼

古津(20分) 集落の神社(35分) 成相寺分岐(5分) 万雲塔(7分) 朝日山西ノ峰(10分) 朝日山三角(30分) 成相寺(50分) 朝日ヶ丘駅
▲地形図▼ 5万1:10,000 東豊・今市 20万1:60,000

不意に開ける大峰・奥高野山系の大展望

唐笠山から行者山縦走

酒井賢治

大峰

唐笠山は数ある大峰前衛の山のなかで、最も西端に位置する山で標高1118m。国道168号線が走る十津川の谷を隔てた向こう側はもう奥高野の山域である。

五条方面から南へ走り天辻峠のトンネルを抜け大塚村坂本へのくんだり坂にさしかかる頃、左前方にテレビアンテナの建つ行者山の後方に、秀麗な笠形にそびえる唐笠山が目に入る。

この山に初めて登ったのは平成元年の11月だった。この年の2月、私は感染性のA型肝炎のため3か月間入院するはめになった。

ようやく医者から登山が解禁され、簡単な山歩きで徐々に体力を回復させたのち

登ったのがこの唐笠山だった。岳友とのマイカーによる唐笠山・ヒストン山行であったが、久しぶりの本格登山に、私は健康のありがたきをつづく感じたのだった。人間やはり健康が第一だ。

唐笠山は山頂の展望こそないが、深い樹林帯の縦道途中、所どころで突如として広がる大峰山脈、大峰前衛の山々、そして奥高野山群の大展望は、やはりこの山だけでしか味わえない「山道回」であろう。

4月13日(土)、早朝自宅出発、南海電鉄線渡発6時30分の高野山行き急行に乗る。橋本でJR和歌山線に乗り換え7時45分五条駅着、47分発の奈良交通・湯の峰温泉行き的小型バスに乗る。乗客は温泉へ行く初

天辻峠南より唐笠山(中央)と行者山(右)



老の女性二人と私のみ。バスは紀ノ川を渡り春の西吉野路を南へ走る。天辻峠への急坂を登りトンネルを抜けるともうそこは大塚村で、きょう登る唐笠山をはじめ1000m級の山並みが目に飛び込んできた。バスは朝一番の新聞配達も兼ねており、途中から乗車した女性が運転手と呼吸よろしく随所に新聞を放り投げていく。坂をくだり坂本の集落を通過し、狭谷貯水池左岸に沿って走り、8時55分大塚村役場前で下車。



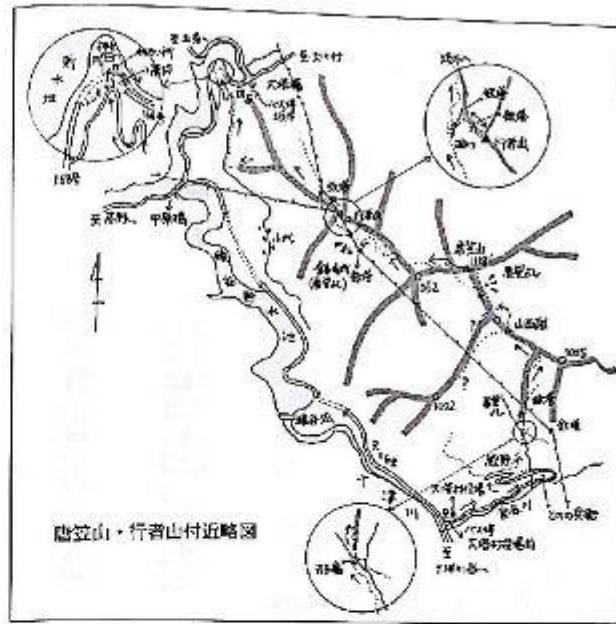
南笠山南の尾根より大峰連峰と前衛の山々

山腹の下部は踏み跡を境に西側は樹林だが、東側は灌木帯の斜面が谷にくだっている。登るにつれ大峰連峰の展望をほいほいと見ている。近く流山・天狗山・下江

山など大峰前衛の山々、そしてその向こうに白いヴェールにおおわれた福村ヶ岳あたりから秋津ヶ岳にかけての大峰山脈が視界いっぱい広がっていた。天狗山・高城山などは東尾根に連なっていてここからは見えない。10分ばかり大観に見とれての小休後、高城山山頂部の樹林帯を登る。雪の斜面に梅花状の動物の足跡が無数に付いていた。雪で滑りやすい山腹を登りきり樹林の中の山頂東部の一角に出る。ここは山腹が東、南にはほぼ放射状にくだっている。逆コースの場合細心の注意が必要だ。東西に平べったい山頂部を1000ほど進み、11時10分西端にある高城山3等三角点に着いた。樹林と自然林が密生し展望なし。私だけの静寂のひとときを楽しんだ。展望のない山頂に逗留は無用、すぐ西尾根をくだる。

と前方に樹林におおわれた小高いピークが現れ、その鞍部に左から巖野と山西を結ぶ旧道が上がってきている(この道は現在廃道らしい)。ここが山西尾根で今まで歩いてきた主尾根の道はそのまま腰野側にくたり廃道(?)となってしまうので注意が必要だ。高笠山へはササに付けられたテープに流れピークに向かってまっすぐササやぶを分け、山西側へくだる薄暗い樹林の中の道をゆく。途中からピーク東側山腹につけられた踏み跡を極くよりに進みピークの北側鞍部に出た。前衛、背野をバックに薄く雪化粧した高笠山がピラミダルにそびえ、大きな尾根を東にのびている。ここでも腰野の方向へ道がくだっている。逆コースの場合は注意が必要だ。

ここからの縦走は初めてだ。薄く雪が積もっているので踏み跡は定かでない。地図と磁石を頼りにどうにか鞍部にくだる。左後ろから先ほど見通したトラバース道が合流、樹林と自然林に分かれた同尾根上の不明瞭な踏み跡を進む。次の10062mピークは右へ山腹をトラバースした。途中、樹林が切れ今まで見えなかった天狗山・高城山・武士ヶ峯など大峰前衛の山々が再



高笠山・行者山村近略図

の民家に着いた。後ろを見ると、送電鉄塔が頂上近くまでのびる白六山が、大きく立ちのぼっていた。尾根になった車道を進み、左に回るところから車道を離れ、すぐ谷に沿った小道に入る。道標もないので杉の木に黄色のテープを巻きつけておいた。谷右岸の道を5分も歩くと、道はゆるやかに谷にくだり、九六橋で左岸に渡ると、右の谷谷を渡る道とまっすぐ尾根に登る道に二分する。以前に登った時は右へ折れ支尾根を登って主尾線上の1005mピークの東の鞍部に出たが、きょうは赤テープに導かれてまっすぐ尾根道に登った。拾

の樹林の中の大きな尾根をぐんぐん登って高度を稼ぐ。薄暗い樹林から開放され木立帯に入ると、二日ほど続いた季節はずれの寒波で雪がうすうすと積もっていた。明るい日差しは積雪の急坂を登り、10時ちょうど地図上の約7800mに達する送電鉄塔に着く。白六山と高笠山主峰からくだる支尾根のV字形の空間に奥前野の山並みを見る。10分ほど小休した。鉄塔を少し上がった所で、道はまっすぐ尾根に沿って道と左へ尾根を直登する道に分かれる。主尾線への近道である左の道をとった。落ち葉の上には、ほど雪が積もった。ザグザグ道を登る。雪をつけた小枝や葉がまっすぐに空に舞き、雪解けの音がポクポクと帽子にかかる。雨具をとり出して着けた。尾根上部から1005mピークの南面をトラバースするように左に横き、10時40分頃主尾線鞍部に着く。以前は1005mピーク東の鞍部からここまで縦走し、天狗山・高城山・白石山・武士ヶ峯など近くに続く大峰前衛の山々の展望を楽しんだが、今回は望むべくもない。右樹林、左自然林の主尾線を進む。このあたり、以前は右に明るい展望が広がっていたが樹林が成長して見えなくなっていた。10分も歩く

後衛の前から奥谷川の渓谷に沿って腰野への車道を進む。途中に料理旅館「との兵衛」が崖に張りつくように新設されていた。大きく車道をカーブし腰野の集落に入る。車道は村中を迂回して登っている。逆コースに付の階段道登って再び車道に出て奥

の民家に着いた。後ろを見ると、送電鉄塔が頂上近くまでのびる白六山が、大きく立ちのぼっていた。尾根になった車道を進み、左に回るところから車道を離れ、すぐ谷に沿った小道に入る。道標もないので杉の木に黄色のテープを巻きつけておいた。谷右岸の道を5分も歩くと、道はゆるやかに谷にくだり、九六橋で左岸に渡ると、右の谷谷を渡る道とまっすぐ尾根に登る道に二分する。以前に登った時は右へ折れ支尾根を登って主尾線上の1005mピークの東の鞍部に出たが、きょうは赤テープに導かれてまっすぐ尾根道に登った。拾

の樹林の中の大きな尾根をぐんぐん登って高度を稼ぐ。薄暗い樹林から開放され木立帯に入ると、二日ほど続いた季節はずれの寒波で雪がうすうすと積もっていた。明るい日差しは積雪の急坂を登り、10時ちょうど地図上の約7800mに達する送電鉄塔に着く。白六山と高笠山主峰からくだる支尾根のV字形の空間に奥前野の山並みを見る。10分ほど小休した。鉄塔を少し上がった所で、道はまっすぐ尾根に沿って道と左へ尾根を直登する道に分かれる。主尾線への近道である左の道をとった。落ち葉の上には、ほど雪が積もった。ザグザグ道を登る。雪をつけた小枝や葉がまっすぐに空に舞き、雪解けの音がポクポクと帽子にかかる。雨具をとり出して着けた。尾根上部から1005mピークの南面をトラバースするように左に横き、10時40分頃主尾線鞍部に着く。以前は1005mピーク東の鞍部からここまで縦走し、天狗山・高城山・白石山・武士ヶ峯など近くに続く大峰前衛の山々の展望を楽しんだが、今回は望むべくもない。右樹林、左自然林の主尾線を進む。このあたり、以前は右に明るい展望が広がっていたが樹林が成長して見えなくなっていた。10分も歩く

び目に入った。実にすばらしい連朝だった。ビーク西の敷部から道は明瞭になり、少し進んだところでまた二分する。

まっすぐ尾根道を進んだが、ブッシュがひどくなったので途中で引き返し、左へゆるやかにくだる道を選んだ。深いササやぶを分け尾根を登り進む。もう雪もななく頭上から暖かい日差しが新緑を透してふりそそぐ。二か所ほど濡れた小谷を渡ると左への送電鉄路分岐を過ぎ、さらに尾根をトラバースして行く。どうやらこの道は鉄路の送電路のようだ。右頭上に青空に透けた樹林の稜線を見る。やがて道は樹林から開放され、右へ明るい山腹を登ってゆくと突如展望が開け、左に奥高野山群の大パノラマとなった。

正面には、陣ノ峰(1177.7m)と矢放峠西の1151.1mのビーク、そして北に続く連嶺が野放崗な山容で続いている。この山容には、そびえる、というスマートな形容は適当ではないように思えた。そして左方遠く、清水峠から伯野子店にかけての奥高野の山並み、右には陣ノ峰を始め高野、西吉野方面の山々を鮮やかに見る。後方を見ると行者山がすぐ頭上にある。時刻もちょうどお昼どき、青空に広がる大展望を前に

コンロに火をつけた。

12時半、展望所を出発。行者山の山腹を捲いて10分程で行者山西の岩場を登る。ここには洞窟や後の行者をまつる祠があり、送電鉄塔がすぐ横に建てられている。バックスキムに50ほど登り返し、行者山(1101.0m)の頂上に立つ。テレビアンテナが建ち灌木に閉まれているが、北から東方向にかけて展望が広がっていた。薄い踏み跡があったので稜線伝いでも来らぬそうだ。もとの鉄塔までくだると裏下に狭谷貯水池と橋が見え、高野の山々や遠く金剛・紀原の山並みも望めた。

北方向に明確な道がついているにもかかわらず、下に見える橋を大橋橋と思いつく一層下山方向を読み誤ったが、地形図と磁石で中原橋と確認し、13時過ぎ北方向への道をとく。樹林の山腹をゆるやかにくだると、行者山から北西方向に張り出した小尾根のり高度を下げる。途中の送電鉄塔で道は二分するがまっすぐ小代への道を選んだ。樹林中の道はすかすか古くから付けられていたようで、展望はないが静かなくだりやすい道だった。途中で彼にそれを道が二か所ほどあったが、かまわずまっすぐぐんぐんくだる。左に磨崖を見てすぐ坂本

から小代への昔の西郷野道に沿く。右へ進む一軒家の前を通り過ぎると舗装道となり、のどかなたたずまいの坂本の集落を行く。小型トラックの行商人が露店を開いている。

村の舗装道が左へ大きく曲がるところで村邊を離れ、神社の休憩所から階段をくだる近道を通って国道168号線・坂本トンネル横にくだり着く。1等水準点・439.9の地点と明示されている。

貯水池に沿って3000ほど送電道を歩き、14時頃坂本バス停留、15分程五条方面への奈良交通特急バスに乗る。バス客は4〜5人でガラガラ、天辻峠への急坂を登りさったあたりで空越しにきょう歩いた唐笠山から行者山にかけての稜線が目に入った。唐笠山はまさに、そびえる、にふさわしい山容だった。(平成8年4月13日歩く)

△コースタイム▽

大塔村役場前(1時間) 送出鉄塔(30分) 主稜線に登る(30分) 唐笠山(1時間10分) 行者山(1時間) 坂本バス停(地形図) 2万5千11南日東・狭谷貯水池 昭文社「56大峰山脈」

連載

日本霊山紀行 31

笠ヶ岳

2898m

浅野孝一

山名はその形によって名づけられるものが多い。人のかぶる笠に似ているので笠ヶ岳というが、この山名は日本全国に多数ある。その中でも飛騨にあるこの山が一番標高が高い。

この山を開山したのは捕鯨上人であるといわれている。このことは槍ヶ岳(本誌11号)の項にも書いたが、捕鯨上人の略歴を記すと、天明二年(1782)越中国新川郡太田河内村(富山県太田町内)に生まれ、諸國を巡錫した念仏僧であったとも伝えられている。

文政四年(1821)、笠ヶ岳山嶺の岩井戸村において笠ヶ岳登頂を完結し、翌文政五年(1822)登頂を果たした。次い

で文政六年(1823)6月同行18名、翌文政七年(1824)8月5日、同行者6名を伴って登頂、阿弥陀仏を山頂に納めたと伝えられている。しかし笠ヶ岳の初登頂は、それより前の天明二年(1782)高山宗献寺の南嶽上人によって行われた。捕鯨の登頂記録は「迦多寶菩薩出現記」にまとめられているという。

笠ヶ岳について「日本山嶺志」は「笠ヶ岳、飛騨國吉城郡ノ東方ニアリ、上野村大字田原家ヨリ凡四里二十石町ニシテ其山頂ニ達ス」とあり、「はんどぶつくふおあ、じやばん」からの引用が載っている。そこには「……中尾ヨリ登ルカ可トス、中尾ハ張天樞天ヲ以テ破レル一小村ナリ。……密

坂戸岳から見た笠ヶ岳



路難ル困難ニシテ、上リ八時乃至九時、下リ七時乃至八時、間ヲ要ス、長老ウを率テ一ウエサと云ク、天明山嶺シ右儀ニテ、岩石多ク且シ激流アル溪谷ヲ登リ深林ニ入ル、深林ノ下草ハ足ヲシラヌヲ以テ注意セザル可カラズ、」らなみにウェストンが笠ヶ岳へ登ったのは明治二十七年(1894)夏のことであった。

ウェストンは明治二十五年(1892)、明治二十六年(1893)にも笠ヶ岳の登



笠ヶ岳山頂の祠の前にて



笠ヶ岳山頂

▲参考タイム▼
 (9月16日) 新穂高温泉8・00ーわさび平
 小原9・45ー55ー登山口10・10ー秩父沢11・

▲参考タイム▼
 (9月16日) 新穂高温泉8・00ーわさび平
 小原9・45ー55ー登山口10・10ー秩父沢11・

杓子平から小さな尾根を越え、左保林道へのくだりの斜面となる。始めは草深い斜面をジグザグにくぐり、常に前方に穂高連路を見ながら徐々に進むが、灌木帯に入ると登山道に大小の岩が出てきて歩きにくくなる。左手下に見える穴毛橋を目標にくぐる。数年前崩れて通行禁止となった地点から、左に新しく開かれた登山道に入ると、岩や木の根が多くなって歩きづらくなる。さらにくぐってブナ林の中となると、木の根が網状に残っていてそこに足の運びは困難となった。

被凍より約6時間かかって左保林道におり立ち、流れている清水を飲んだ時はホッとした。

新穂高温泉から自動車に乗り、中尾温泉の民宿「たきぎわ」に泊まった。この宿の風呂は湯から湯杖がよく見えた。三日間の汗と疲れをゆっくり流した。

四日目、快晴。乗鞍スカイラインから笠ヶ岳の雄姿をながめてから帰京した。
 (平成8年9月16日、19日歩)



頂をめざしたが、果たせず二度目で登頂を果たせたわけである。『日本アルプス登山と探険』(山村精一訳・梓書房版)の中で「私達は右へ折れ、北東へ鋭い尾根に沿って頂上迄突き進んだ。……頂上へは二時四十五分に達した。」と記している。満田川の支流穴毛谷からの登頂であった。

私が笠ヶ岳へ登ったのは四十年前ほど前のことであった。山仲間3名で双六谷のゴッラ谷の軌道歩き、途中一泊して双六小屋に達した。小屋でお会いした深田久弥・山川勇一郎さんと笠ヶ岳に登り、前夜しながらクリヤ谷を横見温泉におりた。夏で

あったがくんだり着いた時には暗くなっていた。翌日は中尾峠を越えて上高地へくぐった。深田さんたちは磐梯を越えて中ノ湯へ行かれた。その時の深田さんのポートレートを朋文堂の雑誌「山と高原」に発表したことを覚えていた。

今回は5名の仲間と中央道を夜間走って、新穂高温泉に到着時暗着いた。その日の泊まりは鏡平なのでゆっくりと穂高岳や焼岳を眺めながら登り、秩父沢で昼食をとった。

鏡平への登りで私の両脚が痙攣をおこし、歩行できなくなった。友人にザックを持っ

てもらい、ようやく鏡平小屋に着くことができたが、寝るまで痙攣は続いた。

二日目、雨の模様は治まったので6時半に出発した。朝から霧が出ていた。稜線からは時どき穂・穂や双六所・東御岳が見えたが、笠ヶ岳のトラバース途中で昼食をとっていたら雨が降ってきた。いちおう雨衣を着けたが、雨は本降りにはならなかった。小笠の登りは曇々と広がる右の海であった。笠ヶ岳山荘は夕食になるまでに約15名の登山者があった。夜には、山荘の主人がその日黒部湖流で釣ってきた岩魚の付酒がふるまわれた。外では星のまたたきを見ることができた。

三日目、笠ヶ岳山頂へは霧の中を登った。祠は山頂から西へ少しくだった所にあった。山頂からの展望は西北に向かって広がっていたが、穂・穂方面は見えなかった。しかし天候は徐々に快方に向かっていた。笠新道分岐で笠ヶ岳を眺めたが、山頂にかっ

ていた姿はついにとれなかった。

眼下に杓子平が広がっている。岩の斜面からカールポーン状の草原の間をゆるくくぐった所が杓子平であった。ゆるやかな草原に高山植物が咲き、雲の切れ間から乗鞍岳方面が見えた。

登山に必要なものは、
 国産・舶来
 すべて揃っています。
 足にピッタリ/
 登山靴のことならお任せ下さい。
 (定休・火曜日)
 〒504 京都市中京区丸太町通堀川東入
 ☎ (075) 211-5788
 麻 (075) 231-0318
 山とスキーの専門店
京都 ムラカミ

30ー12・00ー大ノマ乗鞍分岐14・20ー30ー
 鏡平小屋16・00(泊)
 (9月17日) 鏡平小屋6・30ー被凍7・50
 ー8・00ー大ノマ乗鞍8・30ー40ー秩父沢
 11・15ー25ー抜戸岳中腹12・00ー30ー抜戸
 岩13・30ー笠ヶ岳山荘14・40(泊)
 (9月18日) 笠ヶ岳山荘6・30ー笠ヶ岳6・
 50ー7・00ー笠ヶ岳山荘7・15ー20ー抜戸
 岩8・10ー笠ヶ岳新道分岐8・35ー9・15ー
 カール底9・40ー50ー杓子平10・35ー20
 7・5分・昼食12・00ー30ー左保林道15・05
 ー15ー新穂高温泉16・20
 ▲地形図▼2万5千1:笠ヶ岳・三保連岳岳

幻想的樹林の山

猿ヶ馬場山

松田敏男

奥飛騨

猿ヶ馬場山の中腹にて



1994年の9月に標高山に登った時、大きく面影を広げた猿ヶ馬場山を見て、童画のような山だなあとという印象を持った。それは山頂付近一帯の大きな針葉樹の疎林が、一本ずつ丁寧に描かれたように並んでいて、山の空に気取りがなく、とりとめのないようなおどろかさで、まだまだ早さの残る初秋の日差しを思わせる分浴びながら、寝そべっているように見えたからである。呼べば割が返ってくるような距離だったが、その日はとても往復できる時間ではなかった。猿ヶ馬場山の山行の計画が巡ってくるまで待とうと思いつながら、熱い視線で眺めたのだ。

それが半年あまり後のゴールデンウィーク

クに実現した。ルートは全く別方向からで、旭谷ダムの湖東の林道を登山口とするものだった。メンバーは時高さんをリーダーに、6名である。残雪のテント泊まりの山としては、たくさんの方が集まった。

旭谷ダムの東の林道に入る時にダム湖畔に通じる道に入ってしまい、再度分岐まで戻る。地形図をよく見れば分かるのだが、正しくは尾根の東側を行くべきところを全く違う方向に行ってしまうように思っただけが間違っていた。すぐに折り返してその小さな尾根を乗っ越してダム湖を見下ろす所に出た。

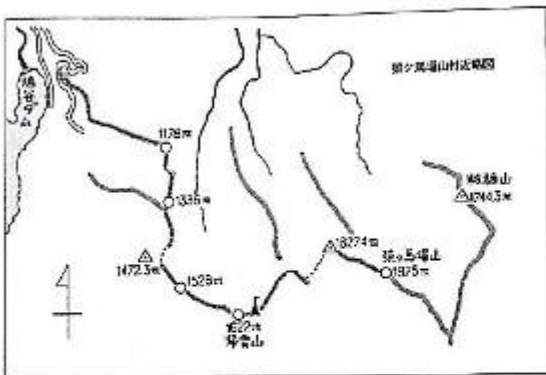
頭上に高く野谷山や三方岩山などが見える。白山の北方の山だ。晴雪が光り輝

いている。あまりの高さと、突然の白い峰の出現で、一気にわれわれは活気づいた。標高700m付近で踏み跡を見つけた。車を駐車しやすい所に戻して、その細い道をたどることとなった。

はつきりとした踏み跡はほんのつかの間、すぐにイバラの混じった歩きにくいやおどろきとなる。雪が全くないので、テント泊の重荷では前途多難を思わせた。しかしまた歩き始めて聞がなく、ふり返れば少々薄く

なってきたが雪の山が間近に見えるので、勢いよく登る。久しぶりに白山近辺の山に米ることができて、気持ちは早くも全開だ。見える山が大きいからか、力の湧きかたが違う。登るにつれて木が大きくなり密生した灌木が少なくなつて歩きやすくなった。

1178m地点に着いた。すっかり景色が変わった。前方は雪の斜面が続いてい



霧だった。太い幹の、ナラだと思われる古木が点在していた。われわれはそれぞれ、その寂しい静けさに溶けこむように、「言葉少なにひと息入れた。それからほもつ、冬枯れた林の雪の斜面を黙々と登った。

そんな静かな雰囲気を持ちながら、左右に揺れながら、山を登るがすように近づいて来た一団があった。男性2人を含む6人の山スキーのグループだった。女性の歓声は爆発音だったが、われわれを見てちょっと休憩となった。頂上では天気が良くて白山はきれいだったとか、この山は300名山に入っていて登らなくてはいけなかったとか、元氣に話し、また歓声とともに一気にくだって行った。われわれはただただ恐れているばかりに見送った。

また、黙々とゆっくり雪の広い尾根を登り始める。霧は一層深くなり樹々の枝ぶりの美しさが、幻想的に現れては消えていく夢心地の世界が続いた。旭谷山から東にくだった鞍部で、もう16時前。そこがテント場に決まった。

6人用テントに6人なので少々窮屈だが、雪の中の楽しいテント泊となった。まずビールでひと息ついて温かい夕食にする。たくさんいるから楽しさ最高である。それ

ぞれ違う職業だから日常のつまらない話題などには迷い込まず、山の話をひととおり繰り広げれば酔いもほどよくまわって幸せな眠りにつける。すぐに眠れなくてもこんな山深い雪山に何の不安もなく身を委ねて夜を明かせることに、感謝の気持ちでいっぱいだ。

翌朝も霧の景色に変わりはない。低身で出発。地形が複雑で尾根の上にはきつちりのれているかどうかがなかなか分かりにくい。リーダーの時高さんは地形図片手に細かく風向きを確認しながら慎重に進む。枝々に赤布を細かく付け、しっかりと下山の準備をする。樹林が少し切れている所は折った枝や長いナナに赤布をつけて雪面に突き刺す。

三角点が埋没しているだろう立場に出た。角度を何度東にふって山頂付近の針葉樹林帯に出た。旭谷山から見たあの童画の世界の中にあるのだ。左右遠くに針葉樹が並んでいて尾根の真ん中は幅の広い雪面だ。

猿ヶ馬場山の山頂では針葉樹は雪深く沈み、上部のみが出ていた。天気が良ければ雪ですいぶん高くなっていくから、まさかすばらしい景色を見ることができただろう。それになんと言ってもこの山は、この

付近では最高峰なのだから。高賀山からは大きな猿ヶ馬場山にかくされて見えなかつた白山木峰や、印象的だった茨ヶ岳や大笠山が白く隠れ込んでいたことだろう。しかし今は完全なホワイトアウト。雪と霧の境目もおぼつかない白い世界。

くだりは赤坂を回りながら足早にくだった。テントを撤収してくだり始めた頃から、徐々に空が明るくなりだした。きょうもこの奥深い山に登ってくるグループに出会う。なかなか人気のある山だ。雪が溶えてやぶこぎが始まる頃には、また野谷井可山などが出現してくる。

車で少し南に走ると平瀬温泉がある。三方峠山の登山口があり、その山に登った時に入ったが、料金の安いありがたい温泉だ。

山の帰りは疲れた身体を温泉に沈めて、山行のしめくくりとすることが最近とみに多くなった。奥飛騨の北の越中なら、初穂山や入形山、三ヶ辻山に登った時の「五箇山温泉」。飛騨川沿いなら萩原町の「雅乃湯」。これは飛騨川河川敷にある露天風呂のみできわめておおらかな風情。ひとつ西には真新しい「明宝温泉」。丸頭池川沿いなら「丸頭池温泉(軍成の湯)」。ここも新し

くて露天風呂が大きい。白山山中では古色蒼然の趣の「壺ヶ湯」。坂取川、根尾川近くなら、その中間にある「瀬見峡温泉」。入り口が少し観光地化しているが温泉はいい。中央アルプスや南アルプスの伊那谷は「小川温泉」か「屋敷温泉」。松尾温泉街も観光地化しているが、八合温泉が温泉にあっ

てきれいで露天風呂も広い。木曾谷なら、わざめホテルの「トロン温泉」だ。大峰や台高にも幾つもの新しい公営温泉ができています。大合ヶ原と大峰山脈の北山川沿いに「上北山温泉」。台高山脈の西に「東吉野やは大温泉」。大峰の天川村には「天の川温泉」と「海川温泉」。大峰山脈の西には「西吉野温泉」。その奥に「温泉地温泉」。

これらは500円までの料金で、山の帰りにさっと入って疲れをとり、山旅の楽しみに思い出をひとつ増やしてくれた温泉街である。(平成7年4月29日130日歩く)

△コースタイム△

鳩谷ダム東の林道登山口(4時間30分) 雲山の東の鞍部(1時間30分) 猿ヶ馬場山(4時間) 登山口
△地形図△を5万5千1平瀬

山岳信仰の山・高賀三山

高賀山・瓢ヶ岳・今淵ヶ岳

鷲見守康

美濃

岐阜県郡上郡八幡町と武儀郡坂取村・洞戸村の境に位置する高賀山(1222.4m)、その南麓、郡上郡美並村と美濃市との境に位置する瓢ヶ岳(1163.3m)、そして峡谷を隔て瓢ヶ岳と向き合う美濃市の今淵ヶ岳(1049.8m)は高賀三山と呼ばれ、古くから山岳信仰の山として知られている。養老年間、瓢ヶ岳に住む鬼の退治を命ぜられた藤原高光が、虚空蔵菩薩の助けをかりてこれを果たしたとされる。平安時代には山籠りに高賀六社が建てられ、鎌倉時代には仏教の道場として栄えた。江戸時代には丹室主人も入山し、その作といわれる同室仏が今日でも山麓に散在するなど、史跡・伝説が多い。

美濃の平野部から望む高賀三山は、低い山並みの北奥にひととき高く秀麗な山容を見せ、美濃の1000級級の山を歩くとき、その姿は、重畳と連なる美濃の山々の位置関係を知らぬ指標ともなっている。

高賀山 山を歩き始めてしばらく経ったある日、出動途中の街角で節節のあるピラミッドな山の姿を目のあたりにし、ずいぶん驚いたことがある。それが高賀山であった。まさか、こんな場所から見えるなんて……と思うほど意外だった。最初に登ったのは昭和35年の4月であった。全くうかつにもルートから離れてしま

「高賀の森」から見た高賀山



い、苦勞しながらやぶを突破して、やっと稜線の登山道を見出したとき、咲き誇るカタクリ(ニリ社)に出会った。高賀山は、洞戸村の高賀神社から登る。高賀神社は高賀六社の一つで、その社伝から高賀三山修験道の縁起を知ることができ

神社付近一帯は「高賀の森」として整備され、登山道は「高賀の森」からのびている。御坂谷をつめていくコースはひたすら

低山登山～本格トレッキングまで、登山用品のことならおまかせ下さい。

新ハイの全品証で更に割引します。

とスキーのヨシヨシ

〒543 大阪市天王寺区南河堀4-70 TEL06(772)7231

JR天王寺駅 北出口右へ 歩道橋渡ってすぐ

急な登りで息が切れる。途中、10人位なら
雨留りができそうな不動の岩屋を見て、な
お喘ぎつつ進むとやがて御坂峠に至る。峠
からは龍ヶ岳と今淵ヶ岳を背にしての尾根
歩きだ。山頂は狭く、周囲を樹木に囲まれ
て展望はすっきりしない。

「同じ日に登ったのは二年後の11月であっ
た。「高賀の森」整備工事の一環なのか、
御坂峠からの尾根道には所どころ階段が
つけられて砂利が敷かれ、手すりまでも設置
されていた。安全に歩きやすくなったこと
なのだろが、何とも言いがたい違和感が
あった。

空には灰色の雲が広がって北面も強く
り、みぞれ模様の中やよとたどり着いた



山頂には大きなゴミの山が放置されてい
しばらくは立ち尽くしていたが、ザックを
降ろすこともなく踵を返した。

それ以後というものは、高賀山には足を向
けることもなかったが、昨年の10月、龍ヶ
岳へのアプローチの林道が通行止めのため
予定外に高賀山を歩くこととなった。

登山口から間もなくのところまで咲き散
っている秋の花に出会った。センブリ（リン
ドウ科）とシラヤマネキク（キク科）……、私
には初見の花だ。そして、ムラサキ科の花
この季節に花をつけているムラサキ科の野
草も初めてであった。どうもオオルリソウ
らしいと思うのだが、今秋にでも再確認し
てはつきりさせねばならない。楽しい宿題
をもつた。

鞍線には小規模ながらブナ（ブナ科）・
ミズナラ（ブナ科）林が形成され、山頂付
近にはブナの立派な成木もある。高賀三山
系唯一のブナ・ミズナラ林とも言えるよう
で、今までなぜ気づかなかったのか、と悔
やまれた。

高賀山は、落ち着いた雰囲気を取り戻し
ていた。いや、私自身が落ち着きを取り戻
し、人間の手によって一時的に汚された高賀
山に勝手に失望はしたものの、改めて

高賀山の本来の良さを見出すことができた
のかも知れない。

龍ヶ岳

40歳から山を歩き始め、初めて山っしい
山に登ったのが龍ヶ岳だった。それから数
えてみると、今までに七回登っている。
龍ヶ岳のセールスポイントは、何より優
れた山岳展望である。尾根上にある「見晴
らし台」や山頂からは、300m近い眺望
が得られる。

登山道は美並村の御川谷からのルートも
あるが、片知深谷からのルートがポピュラー
である。片知深谷は、龍ヶ岳と今淵ヶ岳の
山脈を流れる大きく開けた雰囲気の良い明
るい渓谷で、登山口付近は「ふくべの森」
として整備され、大きな駐車場とトイレも
設けられている。

登山口からしばらく石畳の階段が続き、
小沢に出る。小沢を渡り、振り返し、小沢
をつめてせせらぎの音が遠くなった頃、
「骨ヶ岳」という分岐点に出る。

山頂へは左に進むが、いったん右へ、見
晴らし台に立ち寄ってみる。天候にめぐま
れた日には、北斜面が伐採された稜線上か
ら北ア・乗鞍・御岳・中ア・南ア南麓など



龍ヶ岳登山口に群生するコウヤミズキ

の展望がすばらしく、登山者からいっせいに
歓声が上がるところだ。このまま樹傍を
経由し、大岩が点在するミヤコザサ（イネ
科）の斜面をくだり、深谷下流の登山口に
至るルートもあるが、ササが深く足元が不
安定である。

「骨ヶ岳」から山頂へは、樹林の中の尾
根歩きである。北斜面は自然林、南斜面は
ヒノキ（ヒノキ科）の植林という対照的な
景観であるが、自然林の空気が快い。いっ
たんだり、登り返して飛び出た稜線を左
に行けば山頂で、再び山岳展望を心ゆくま
で満喫できる。

龍ヶ岳で印象に残ったのは、春先に登山
口一帯に咲くコウヤミズキ（マンサク科）
と尾根の登山道沿いに咲くカタクリだ。私



龍ヶ岳付近地図

はカタクリにはこの山
で初めて対面し、品の
高さや花弁の基にある
W字形の見慣れた遊紋に
心打たれたのであった。
コウヤミズキの群生
は、その後、木曾の赤
沢自然休養林内で見つ
けた（名前は別名の「マ
トアサメス」）だけで、

それ以外の山ではまだ出会っていない。
また、龍ヶ岳は積雪期にも歩いたことが
ある。ミヤコザサは積雪50cm以下の林床な
どに生え、これを「ミヤコザサ林」とい
うが、それと一致して積雪が如きを認めるこ
とは少ないようで、スノ・ハイキングに適
し、雪上の足跡などを探し、野生動物を確
認・観察するア・ニマル・トラッキングも美
しい。残雪の頃、山裾までおりてきた数十
頭のサル群れを見たこともある。

今淵ヶ岳

片知深谷を隔てて龍ヶ岳と向き合う今淵
ヶ岳は、高賀三山の一つでありながら、今
では訪れる人もまれである。私が登った平
成八年の11月の休日も、終日一人ぼっちで
あった。

連日の残業の疲れで朝早くまで眠り込み、
わが家を発ったのは午前9時を回っていた。
片知深谷からの登山道は広く、要所になる
築港市の産神社から歩いた。産神社も高賀
六社の一つで、創建は平安時代という。
神社から右側の林道を進むと、10分ほど
で登山口となる。しばらくはスキの植林帯
で山腹をトラバースする。尾根に出ると法
雲院林道があり、そこからは鞍線がたどる。

残雪の稜線歩きに春山を満喫した

上谷山・美濃俣丸

石 義 人

奥美濃

上谷山
奥美濃山行は久しぶりだ。昨年春、姥ヶ岳の水芭蕉を見に行き、以来一年ぶりである。どういうめぐりあわせか、はたまた気がおかしくなったのか、今年初めての、そして半年ぶりの山行は長年検閲していた悠雪期の奥美濃上谷山・美濃俣丸という超ハートな山となった。

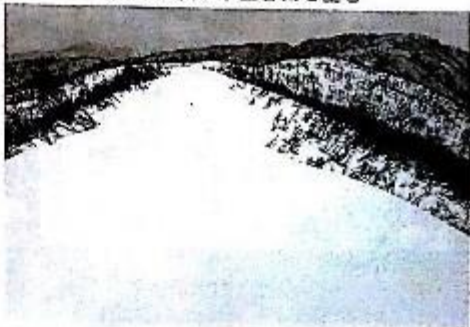
この時期、普通であればすでに雪はなく、登山は不可能になる。しかし、今年は大雪だったからひょっとして、と甘い期待もあって、行ってみることにした。そして予想通り、雪がたっぷりなのはいへんすばらしい奥美濃山行ができた。

96年4月6日、京都を早朝4時20分、車

で出発。一人旅の気分で、いつでも出かけられる。天気はそれほど悪くないがなんとか持ちこたえよう。北陸道の今庄インターであり、国道365号線を経て、広野ダム直前の宇津尾の集落へと向かう。宇津尾谷の林道に入り、すぐのえん堀の側にある広場に駐車する。7時10分。

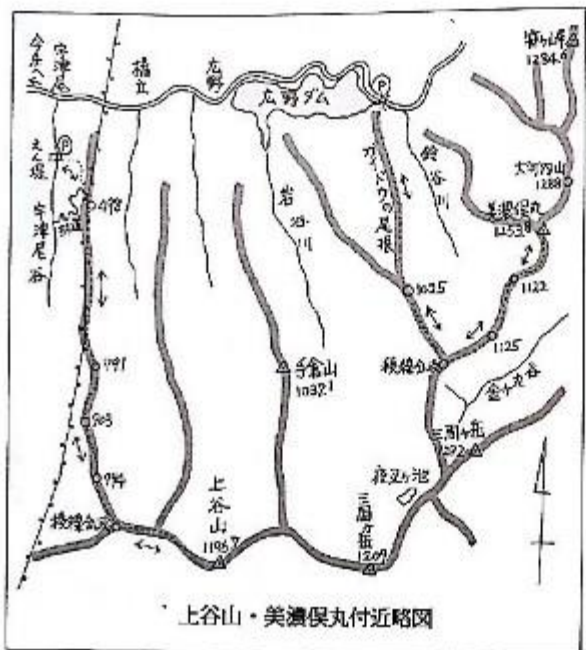
どこから取りつくべきかささんごんごんで、エイヤとえん堀の脇から杉の森林された急な斜面に取りつく。がむしゃらに登ること30分で赤い漆黒線の塔が左下に見えだし、道もゆるやかに登ってきた頃、右より奇麗な巡視路らしきに出会う。これはと方々千の地形図にある登山道に合うらしい。とにかくここから送電線が離れていくまで、(地

黒境尾根から上谷山を望む



図のクワリー岳のピークまで)、快適なコースとなった。きれいに切り開かれ、眺望も抜群。広野ダムが見えだし、美濃俣丸・大河内山・姥ヶ岳が堂々たる真横で真っ白い壁となって目の前にそびえている。この景色のすばらしさを打たれ、「よっしゃ、来週は美濃俣丸へ行くぞ」と即決する。

巡視路に合う頃から雪を踏むようになり、鉄塔を一つ、二つと越えて行く、周りはだんだんと雪の甘雨に変わっていった。ピー



邊の春山を満喫できて最高の気分だ。ルートは晴れていれば見逃すことはなく、屋根通しに登ればよい。テープ等はあまり見かけない。現場検閲着目10時10分。ここまで4時間。久しぶりの山行で、すでにバテバテ。しかも持参した食糧のパンが腐りつかえて食べられない。この分岐に、下山の目標点と黒境の目印を付ける。上谷山がはるか向こうにそびえている。まもなくだだっ広い真っ白の稜線となり、ただひたすら頂上へ頑張りだけ。頂上直下の雪庇が張りだた

細い雪庇を越えさく、やっと、そして暖かにも、とうとう、広い、丸い雪の頂上に着いてしまった。上谷山(1198.7m)着12時15分。

空は曇り、周りの山も薄霧に閉ざされ、遠くはしかとは見えないが、重々として奥美濃の山を眺めながら、「あま登れてよかった」と感懐無量である。ただ一人、ゆっくりにお茶を飲み、昼食をとり、そして昼食を撮る。なんでこんなやぶ山の奥美濃の山が心地いいのだろうか?

天気はもうも開れそうだが、登山時間は短かったが、来た道を戻るしかない。橋立への尾根をくだらうかと考えたが、あの巡視路の快楽さと思うと、そのまま来た道をくだることにした。のんびりと、ゆっくりと、しかし腹がへってどうにもならなかった。駐車地着15時50分、完全にシヤリバチの状態であった。(平成8年4月6日歩く)

△参考タイム▽

京都発4・20 | えん堀駐車地?・10 | 黒境尾根口・10 | 上谷山12・15 | 13・10 | 駐車地15・15
△地形図▽方々千II版取

山と高原地図シリーズ

定価 各700円(税込)

- | | |
|---------------|----------------|
| 1 北アルプス地図 | 34 熊鷹山 |
| 2 白馬岳 | 35 朝日・出羽三山 |
| 3 鹿島槍・黒船嶺 | 36 熊鷹山 |
| 4 駒・立山 | 37 蔵王・奥日光・妙高山 |
| 5 上高地・槍・穂高 | 38 奥穂・早池輪 |
| 6 奥穂高岳 | 39 八幡平・妙高山・妙高山 |
| 7 明礪山 | 40 十和田湖・阿蘇山 |
| 8 中央・南アルプス地図 | 41 ニッコフ・羊蹄山 |
| 9 木曾駒・空木岳 | 42 大雪山・十勝岳 |
| 10 甲斐駒・北岳 | 43 白山 |
| 11 志賀・新石・碓氷 | 44 富士・伊吹・彦根 |
| 12 妙高・戸隠 | 45 四万十・嶺ヶ岳 |
| 13 志賀高原・草津 | 46 比叟山系 |
| 14 野井沢・渡瀬 | 47 京都北山1 |
| 15 西上野・妙峰 | 48 京都北山2 |
| 16 美ヶ原・霧ヶ峰 | 49 京都西山 |
| 17 ハッケ岳・磐梯 | 50 北嶺の山々 |
| 18 富士・富士五湖 | 51 六甲・摩耶・南阿 |
| 19 箱根 | 52 奥秩高岳・二上山 |
| 20 伊豆 | 53 赤崩山・磐梯山 |
| 21 丹沢 | 54 碓氷高原(磐梯中) |
| 22 高尾・奥男 | 55 奥高野(磐梯中) |
| 23 大菩薩峠 | 56 大峰山脈 |
| 24 奥多摩 | 57 大ヶ岳・大ヶ岳・奥多摩 |
| 25 奥武蔵・秩父 | 58 赤田・奥多摩高原 |
| 26 奥秩父1 奥山・奥山 | 59 赤ノ山・奥多摩 |
| 27 奥秩父2 奥山・奥山 | 60 大山・奥山高原 |
| 28 谷川岳・奥山・奥山 | 61 四郎山 |
| 29 碓氷三山・奥山・奥山 | 62 石碓山 |
| 30 尾瀬 | 63 碓氷の山々 |
| 31 日光・奥多摩・奥多摩 | 64 九郎・奥多摩 |
| 32 奥多摩・奥多摩 | 65 奥多摩・奥多摩 |
| 33 奥多摩・奥多摩 | 66 奥多摩・奥多摩 |

※昭文社の「山と高原地図」は年度版として毎年更新発行されます。この山の情報はなるべく最新版をご利用くださいますようお願いいたします。
 ※昭文社の「山と高原地図」へのご質問・ご意見がございましたら、本社編集部「山と高原地図」担当までお気軽にお話ください。また新情報をお知らせいただけます。

昭文社
 株式会社
 本社 東京都千代田区丸の内4-2-11 T102
 電話03(3262)2141(代)
 支社 大塚市栄1-1-1 区西中6-11-23 千532
 電話03(332)5721(代)
 営業所 札幌・仙台・横浜・千葉・蒲田・川崎・名古屋・金沢・京都・広島・福岡

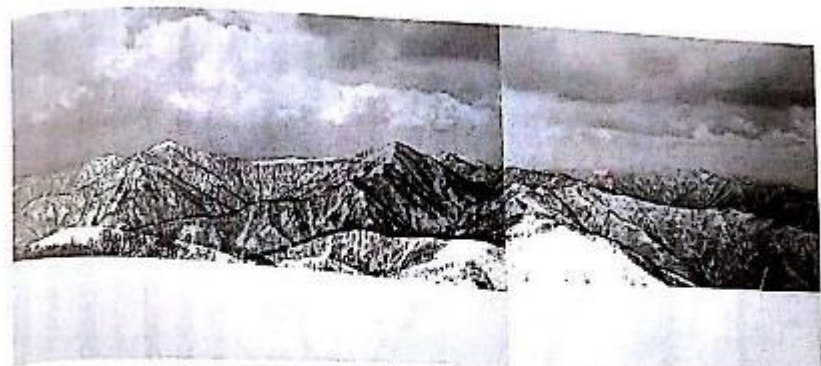


ガイドウの尾根から美濃俣丸を望む

▲参考タイム▼
 京都発4:00 駐車場7:00 白馬岳根元

笹ヶ峰・冠山から熊鷹白山・三ツヶ岳・黒壁岳と復帰し納得。多分、もう二度と来ないであろう頂上に名残を惜しみつつ12時55分に出発。
 来た道をゆっくりと眺みしめながら戻る。頂上を付けた稜線分岐点に三ツヶ岳のほうから踏み跡があるのを発見。しかし人影は見えない。13時55分。ガイドウの尾根の最後のブッシュはやはり強烈であった。駐車地着16時20分。(平成8年4月13日歩く)

「奥美濃の 春風からじ
 ワカンなく 靴は重く 深く滑りて
 ぼつりと二人 心細く 楽しけり」
 二選を経て、懐しの残雪の奥美濃の山々に登りました。幸運でした。幸せでした。そしてつくづく思いました。自然に降り込むことのすばらしさ。奥美濃の山はそんな山行きに最適でした。少々ハードでしたが。
 00 美濃俣丸12・20 55 尾根分岐13・55 1
 駐車地16・20
 ▲地形図V2方5千1広野



美濃俣丸から大河内山・笹ヶ峰を望む

美濃俣丸
 上谷山へ登った次の週末の4月13日、決心した通り美濃俣丸へ。京都発4時。先週と同じ道を一路野野山へと車を進めた。昨日は異常な寒さで、4月のこの時期に京都にも雪が降った。豪雪の地、今庄はどうであろうかと心配する。しかし新雪は思ったほど積もってなく、広野ダム湖がほつさるあたり、橋のたもとに広場に駐車する。7時。
 ここから美濃俣丸の南の県境尾根に突き上げていく、いわゆるガイドウの尾根(街道の尾根)に取りつく。5年ほど前、夏に来たときは途中までうすらうすら踏み跡が残っていた。しかし1025mのピークからは猛烈なブッシュのためあえなく敗退した。今回は二度目のトライである。初っぴは猛烈なブッシュと急坂をがむしやらに尾根筋が上がっても猛烈なブッシュは変わらぬ。しかし、ほのかに道型らしきが残り、おり、昔山道があったことがわかる。悪感苦悶、約1時間であつと雪が出てきてかなり歩きやすくなった。
 雪の上を歩くようになると周囲の景色も見えだした。きょうは天気もよく、先週登った長大な宇津尾の尾根と送電線をはるかか

なたに見ることができた。
 「ああ、先週はあそこを登っていたんだ」。とにかく上へ、上へ。所々雪崩・雪塵・大きな宇津尾が現れ、乗り越え、乗り越え、雪の被覆は快速そのものである。思い切りの急坂を登りきると、県境線に飛び出た。11時。
 目の前に丸い、圧倒的に大きい三ツヶ岳が金ヶ丸谷を挟んですぐそこに見える。実に大きい。そしてはるかかなたに美濃俣丸が望める。「三ツヶ岳のほうに近いけれど、きょうは美濃俣丸へ行くのだ」。
 うわうわと騒ぐ雪崩は上り下りが多く、けっこうしんどい。だが、奥美濃の登山を堪能できるこの尾根にみんなの不満があるのか。誰もいない、一人っきり。苦勞したのが報われるひとときだ。上谷山から、笹ヶ峰、そしてまもなく三ツヶ岳の後ろから黒壁岳。美濃俣丸の奥に、冠山から熊鷹白山もゆっくり見えた。少クラストした雪の雪稜を登りきると美濃俣丸(1255・8m)頂上だ。12時20分。とうとう、ついに、やった！
 何の飾りもない山頂で、ささやかなひとりのランチタイム。改めて奥美濃の山々をゆっくり眺めて眺め、大河内山・

須谷郷を歩く

庭戸山・黒尾山尾根から銚子ヶ口

鈴鹿

筒井克治

若野さんの山行記に惹かれて黒尾山に行くことにした。予定では大念禰神社・黒尾山・銚子ヶ口・水舟ノ池・佐日天谷のコースである。

パーティは4人。まだ僕以外は初心者ばかり。「谷は狭いの」と言うメンバーの要請でルートを変更する。

須谷川の左岸入り口にレッドベッカー号は駐まる。岳へと渡る道場跡は、これから登る庭戸山の頂上から一帯樹林地の上をのびている。準備を済ますと気持ちのよいゆるやかな林の中を、右への踏み分けに監視路の印がないかと注意しながら進む。「まあいいか、道場に登っても一時間程度だろう」と嵐道に入る。

山腹に石垣の遺跡が残っている。しっかりとした石積みは果々とのびて山城のように見える。

道はあやしくなってブッシュに消えた。

あとは流木竹のきつい斜面をよじ登るだけ。急登。死。大汗をかいたころ尾根上の良い道に飛び出た。高曇り、波る風にはなにかしか秋の気配を感じる。見晴しのよい岩の鼻に立てば手前に庭戸山、右手に不老堂、狭間に黄色い顔の水田と黒霧が箱庭のように納まっている。「こんなのがいいの？」今の登りは何やったん」と全てをおまかせのSさんの言葉が明るく飛んだ。

庭戸山は峰を分ける山なのだ。西に雲尾、東に紅葉山が一望に見分けられる。雲尾は

大きな川の合流点で昔は交通の要所だっただろうから、当然この尾根が要衝になったと思われる。そして僕ならこの山に物見所を築くだろうなと思ふ。

くだると腰減、良い雰囲気が残っていた。黒尾への尾根を分けると尾根に渡せてくる。まるで戸を立てたような所。端の戸渡りの名があるが、灌木がなければ難儀するだろう。黒尾谷が差り上がったと、水音が聞こえてくる。足根から近い水場は重宝だ。水場にはけもの足跡がたくさん残っていた。冷たい水で気合を入れると、後はひたすら登るのみ、砂礫の歩きにくい斜面をうんどうんこうと歩みへ卒迫のしじじこらだ。ヒョッコと明るい所に出了のが黒尾山だった。だれ言うともなく「苦勞山やな」の声。それにヒルに噴まれて難苦耐分のだと下さん。

東端には黒尾山の標高板があり、裏には知人の名が記されていた。切り戻きの東からは秋田ヶ岳の稜線が望んで見える。台形の山頂の奥に三角点があり、945・779の高さは真高の山に思えた。進路は南、ヒッシリの灌木を抜けると思ふらしいプロムナードの尾根に出る。「ママ、こんなに素敵な尾根が待っていてくれると入ってふり回くと頂はすでに高くそびえて、ススキの穂がサヨナラをしている。

左手に歩いてきた北西尾根がここからよく分かる。足元を見れば印に感嘆されているの間にかルートを決めていた、でも迷わず黒尾の尾根を突っ切っていくだけだ。尾根が谷に近づく所から須谷川に入る。清流でひと心地ついて須谷をくだることにした。谷の核心部は気が抜けない。「谷は黒尾の」と言ったSさん、声が出なくなってきた。気の毒だが道場でもうろしかなく、

口替れの谷間はうらやましい。最後の流を掘くと、木橋の架かる峠道に出た。右岸石岸と道を拾って谷を抜けて行く。ゴッコと流音が聞えると、レッドベッカー号が待っていてくれた。18時を回っていた。ご苦労さまでした。(平成8年8月25日)

▲コースタイム▼
須谷入口(45分) 庭戸山(1時間) 黒尾山(30分) ガレ場(45分) 10116標(1時間15分) 銚子ヶ口(30分) 北尾根(1時間30分) 須谷入口
▲地形図▼前文社「45御在所・鎌ヶ岳」



は」と、皆さん足取りも軽やか言葉も清らか。突然ブヒーブヒー、イノシシの母子が右往左往、ウリボウが「匹もたついている」「イノシシは昔に生まれるのどちやうのやうか」と思いながら母乳中にお邪魔しましたと声を掛ける。何かおる、テンだ。黒尾の種良い体が駆け抜けて行った。

空以外は何も見えない回廊のような道場が続く。くだりかけのところでお昼にしよっ。食べたあとはザックを枕にひと眠り。出発してすぐガバツと霧が上がったように視界が広がる。スパッと切れた空間は流谷に落ちる。対山はカクレテラからタイショウへの山並みが佐日子谷を隔てて薄日の下に凝っていた。銚子ヶ口は黒尾山の向こうにその姿を見せている。先は長い。

やせ尻橋、木をしっかりと握って渡りきる。何かあるとの声。行ってみると立派な鹿の

角が残されていた。これから交尾期だから、これは昨年の角なんだよといった。歩きにくいブッシュのゴブを焼くも感えると、テープのあるP10116標に着いた。須谷をめぐり黒尾の山並みが見える。あれをぐるっと回って向こうの尾根をくだるんだと説明する。メンバーの音が何となく小さくなって返事が帰ってくる。

踏み分けがない、歩きよさそうな所を探して乗りきれはハゲ地に出た。寝ころんで手足をいっぱいのはいて休憩しよう。チョット歩きよくなったかな、でも四つんばいになってブッシュをぐぐったりしてや。と最後の登りをたどると、大峰への後編が近づいてきた。

頂上でリングワンリングをしてルートのとり直し、銚子ヶ口に15時到着。登り口から1時間余経っていた。

春先に三新間の明からワサビ峠を越えてここに立った時も15時だった。黒尾山で、腰までくぐる残雪の中林越えの位なかったことを思い返す。東に広がる山を登る。その向こうの我が町と伊勢の海が見える。西は黒尾谷から突進の山並みが望める。マッコウの頂。名残惜しいけれどくたろう。北尾根に

野の花讃歌 (20)

市川 正次朗

病床から思いを込めて

昨年の春は最悪でした。というのは、以前からの腰痛がいよいよ悪化、山はもろろん、仕事も日常生活にさえ支障をきたす状態となり、思いきって入院しました。病名は椎間板ヘルニア。最初はリハビリで治そうとしたのですが効果なく、手術をしてもうまいました。腕のよい先生のお蔭で手術は成功、取っ組みしから徐々に起き上がり、車椅子・歩行器に頼っての歩行訓練を経て約2か月で退院しました。

入院中は時あたかも春、病室の木々は新緑から盛の花が咲き、あつこう間に散ってしまい、やがてツツジの花へと移って……。わずかな病床生活でしたが、することがないのでいろいろ考えてしまいます。一番思ったのは、また山へ登れるだろうか、野山の花に出会えるだろうかということ。テレビで放映される各地の季節の情報を楽しみにしながらも、不安がいっぱいでした。

深田久弥さんのテレビシリーズ「日本百名山」は殊の外楽しみでした。北海道から徐々に南下し、中部地方の山が次々と「元気になれたら登りたい」「この山は行ったけど季節を覚えてもう一度」と、思いをはせるばかりでした。

入院中、山の友だちが来てくれるのが何よりうれしかったのです。「きのう、藤原岳へ行ってきたよ、フクジュソウが黄色いじゅうたんのように満開で」「比良はコブシがきれいだった」「北山ではニリンソウがいっぱい咲いていた」と、次々と情



フキノトウ

報を持ってきてくれました。仕事がらみなどのお見舞いの人は、高価な花のバスケットなど持ってきてくれて、それはそれで華やかできれいだけれど、三日もするとほとんどしおれてしまい、余計に寂しい感じ。

山の友だちはだれひとり花を持って来ない。そのかわり、ビールが好きな私のために冷えた缶ビール、そして、藤原山で撮ったという花の写真を持って来てくれた。ほんとうは逆反だが、看護婦さんが来なくなるのを待って、缶ビールをプッシュとあける。おつまみはフクジュソウ・セツブンソウ・ミスミンソウ・ニリンソウなど花の写真。

その写真を通じて、あたりの風景、新緑の樹々の色合い、土の匂い、谷の流れ、そして山道を踏む足音の感触、リニククの重畳感、額の前、絞ればはたばたと落ちるパンダナの汗、峠でのコーヒ、山頂の三角点にタッチして仲間と握手をかかず喜び、大きな展望など次々浮かんできました。

もう一度、山へ行こうよ。ついでにハビリを急げそうになる私を叱咤してくれる友に、ただただ感謝した入院生活でした。

前号から、花の写真は友人1のものです。

京都北山

やぶ漕ぎ痛快山行記 (30) 最終回

京都の市街地展望の里山

桃山から沢山をのんびり歩き

京都駅前の「京都タワー」の展望台に上ると、北西に愛宕山が大きく見え、その右、東方にお碗を二つ伏せたような低い里山がつながっている。まさに北山・南山の山々で、沢山・古井山・桃山である。

JR京都駅発の市バス玄塚行きに乗り、鷹ヶ峰の観光バス停で降りる。西へ光悦寺前を通り、右への京見峠への車道を見送る。舗装の坂道をくだって、千束町の最奥の家から紙屋川にかかる四脚橋を渡り、橋脚を右に入ると林道が西上へと伸びている。

その林道口の左斜面に桃山への山道がある。京都府立大学の演習林の支店根にのり、

京都北山グループ

松・雑木林の細い山道を登ると先ほどの林道が迂回して出くわす。林道を横断し前方の支店根の山道をP466号へと高崖を上げながら進むと岩の湿る山道となる。やがて両面が開け、原谷集落が眼下に見えてくる。ここで小休止。

上方の二次混合雑木林の高所は桃山(466号)だが、道は頂上の少し下を捲いてP469号とこの鞍部におりる。なお登山道から桃山の山頂まではわずかである。右踏み跡をたどればよい。

鞍部で左の原谷におりるやぶ漕ぎを急げ、吉兆山(408号)へと西へ進む。桃山からは昭文社のガイド地図「竹京都北山」

農林橋樑結の登り口 (右下が林道)

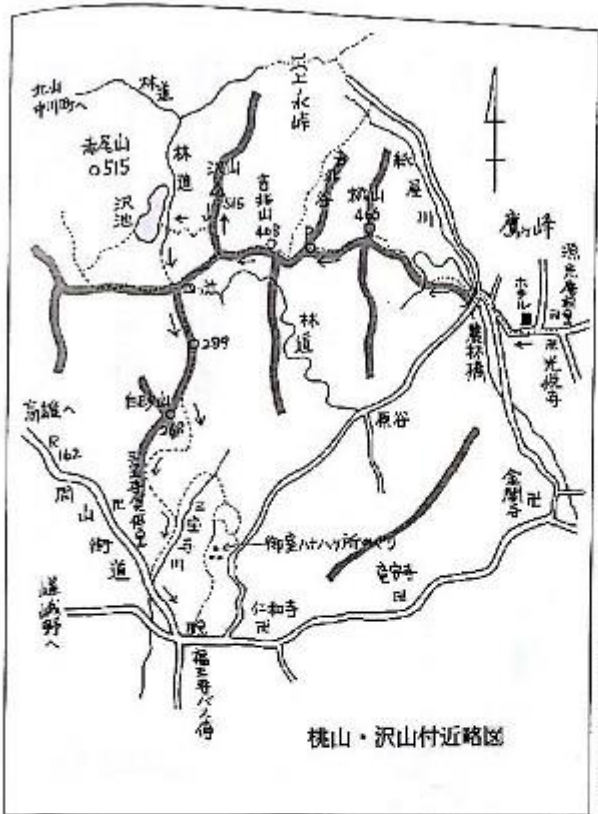


の赤線コースであるが、里山で枝道が多く誤りが肝心だ。吉兆山も頂上を通らず、両斜面の雑木の間の木の根を踏む山道で、木々の間から京都市街が見える。

次の鞍部におりる。右の谷が吉兆谷。この谷にも山道があるが私有林でハイカーは通さない。心ないハイカーに山を荒らされた山王の怒りがおさまらないのだろう。

吉兆山から後継の山道を行くと、三叉路で右に入り北へ進む。漕水をかき分けて行

き左にくだる道を見送って進むと、ホッカリと開けた台地に着く。2等三角点のある沢山(516m)の頂上だ。
雑木林の中で展望はないが割崖のため西方面がわずかに開け、愛宕山が見える。この止場で昼食をとる。ゆっくり樹木を観察しながらの大体に。



食後、先ほど見送った枝れまで戻り、右谷への道をおりる。地図に赤線はないが、これをくたると沢池の東側におりることが出来る。ササと雑木が邪魔するがわずかで車道に出る。時間に余裕があるので池畔におり、山に囲まれた沢池の風景を楽しむ。灌漑用の人工池も年月が経つと古びた味の

ある池の姿になって、自然の仲間に加わりつつあると思った。
先ほどの車道に戻り南に行く。車道の終点から山道になり緩急に登ると四つ辻に回くわす。南面180度の展望は京都市街を中心、比叡・東山・西山・嵐山が一望できる。大きな流れの川は桂川、北山の清水が淀川となり大阪湾に流れる。雄大な眺めだ。
この四つ辻から南にのびる支尾根道をくぐる。風化した花崗岩の道。小松やツツジ・リュウウツの生える支尾根で息通しのよいくだり道。P289跡を踏んで谷の源頭に出て丸太橋を渡り白砂山(268m)のふもとを越えて三三寺川の源頭に出る。
谷筋道をさかのぼれば原谷から御室八十八ヶ所に出て、標高の高い御室の仁和寺バス停にも行ける。
きょううは谷沿いにおりると造園業の床屋横に出る。民家の横をくぐると車の音が聞こえてきて騒々しくなり、周山街道の国道162号線に出る。右に行けばJRバス三三寺駅、京都駅行き便は1時間に一本ある。左に歩けば福王子の市バス停、こちらのほうが市内の各方面に便が多い。
きょううの低山・里山歩きは若い人には頼

りないコースだろうが、中高年の山歩きには無理せずまた初心者の山歩き露店の勉強におもしろいコースとおすすする。ただし途中に水場はない。四季を通じて爽しめ、体力に合った登山訓練にもなるコースだと思ふ。

大光雄の今西通司さんは旧制高校時代、1918年に沢山を初めて登られ、北山の良さを登山友にひろめられたと聞く。「北山から始まりヒマラヤに通ず」、また「北山



沢山の山頂にて

から登り始め、北山で終わる」と言われ、日本の千三百山実録記録のしおりをいたいた。

なお、登山口の洛北・鷹ヶ峰付近や、下山口の御室付近は歴史的な名所や由緒ある寺があり、歩き足らない人は適当に放棄がてら京都の良さを味わいプラスアルファしてください。(平成8年3月20日歩く)

△コースタイム▽

玄塚(1時間30分) 桃山(1時間) 沢山(30分) 沢池(40分) P289跡(1時間30分) 三三寺川(30分) 国道三三寺バス停(休憩・食事時間含まず)
△地形図▽2万5千1:京都市北西部

昭文社「47京都市北西部」
(記録 出口 恵次)

○本誌創刊号から連載しました「京都北山やぶ漕ぎ新快山行記」は、本号で3回となり、いよいよヒリヒリと打ちます。長い間「愛読いただいた方がとうとうございました。」「京都北山」は多くの人に歩いてほしい山域です。(出口)

【この花・この草】
タンポポ (Taraxacum)

キク科

春の野には黄色の花がいくつも咲きます。そのひとつに愛らしい綿毛のタンポポがあります。名前の由来は、タンポポから、綿を布で包んだタンポは、刀の手入れや拓本をとる時に使用します。

タンポポは一個の花ではなく小花の集団で、近頃は外側の総苞が開いている外米種のセイヨウタンポポのほうが多く見かけられるようになってきました。生薬名は蒲公英。開花期に全草を掘り取り天日乾燥して用います。成分はタンニン・サロニン・コリン・イヌリン・ペクチンなどを含みます。

在来種・外来種共にリンパ腫瘍・腫瘍性・皮膚病・感冒時の発熱・尿路感染症・乳汁不足などに用います。ヨーロッパでは健胃薬のハーブとして、また浄化薬として香のサラダに生で入れたりもします。根葉には白髪の特薬としても……。

またタンポポは、就寝運動を行うことにも有名です。庭園に開花し夜間は閉じます。これは花びらの内外面の厚さの差による現象で、夜の冷気から葉っぱを閉じ込めを保護するのに役立っています。

近江側から登る鈴鹿の山々

— 伝説・伝承の紹介 — (2)

風越谷の心中窯・水舟ノ池 姫が瀑布・岳の地蔵さん

岩野明

風越谷の心中窯 紅葉庵に伝わる話
紅葉庵の村におもえと外次郎という相思
相愛の男女がいた。二人は夫婦になりたい
と思っていたが、おもえの父親は、腕のい
い炭焼きの友吉におもえをやる約束をして
いたので、おもえも泣く泣くこれに従っ
た。

山仕事の忙しいある夜、偶然に友吉と外
次郎が同じ夜に窯の夜焚きをする事になっ
た。夜焚きの場合、家族の者が夕方から弁当
を持って山に入るのが習わしになっていた。
その夕方おもえは友吉に弁当を渡し、用事
があると言ってすぐ窯を離れたのである。
しかしその足で外次郎の窯にいそいそと向
かった。秋の夜焚きを虫の声を聞きながら語
り明かし、いつしか東の空が白み始めてい

た。人の来る気配を感じ、たまりかねた一
人はかたわらにあつたトチの木に首を吊っ
てしまった。その後たれ言うともなく、こ
の窯を心中窯と呼ぶようになった。トチの
木は昔を物語るように毎年新たな芽を吹く
のだが、その美しさは例えようもない。
現在の風越谷は約700坪の地点まで林
道のび、植林が進み、砂防ダムが続いて
いて、心中窯の位置は定かでない。

水舟ノ池 「下向通之池」より
雲仙山・御池岳・雨乞岳の山頂にある池
については、いろいろな古物で紹介されて
いるが、鈴鹿で一番大きな水舟ノ池は全然
知られていない。水を運ぶ舟が約1000
坪の山頂にあるというこの水舟ノ池のこと



水舟ノ池

天下おおいに早りして五穀皆焼け焦がす。

これによって佐田村の老若男女十人金米之
兩を乞う請でせられ、定路の前にて人々一
心不亂にこれを祈るに誠心の感ずる処、白
日俄かに曇り天悠然として、彼の水舟の池
の畔より黒雲立ち上がり、一時の間に雨盆
を傾むけ、潤流岸を崩し飛來石を穿ち、騒
雨止むことなし。荒地ごとごとと漣い波紋・
蘇息したであらんと散井雀躍して聲嬉の
歌を唱えて明神を誦め奉ることなりにて、下
向には水舟の池の方へ寄り立ち寄り詠めて



岳の地蔵さん

申しけるは、この池山の頂上と云う。誠に

此の度天下大旱して愛知川の満きえ水切れ
たるに、この池に水の切れざるは、定めて
龍神の水池にてありけるなりと、人々皆讚
嘆せり。それより水舟の池と云う。

雨櫃のこれなる池にありけるは
うたがいもなき神の水舟
龍神の天鼓も残されし水の種
これなる池に開うてぞある

姫が瀑布

指合の深川三丁余り登りければ成坂に着
く。ここより丁余り河上に高さ百丈余り
の瀑布あり、ここに寛正元年の頃左日村の
農父瀑布の近所へ参られしに、彼の瀑布の
処を見られければ、二八余りの容顏美麗な
る姫若一人、いと道々として遊をながめて
在します。農父姫の元へ近づき、君は何人
なりやと尋ねられければ、姫のいわく、我
はこの山守護の龍土の乙姫なりと云う。云



姫が瀑布

を何とか知りたいたいと思ひ、永調寺町佐田村
の河合庄兵衛氏にお願ひして、若宮八幡神
社保存文庫の写しを拝見することができた
が、漢字で書かれた古文書は隠語がむずか
しい。いろいろな人たちの協力を得て、何
とか水舟ノ池と姫ヶ滝について訳すことが
できたので、ここに紹介する。
金峰より三丁余り、西南の方に当りて
頂上に池あり、これを水舟の池と云う。文
永五年五月八日に日二つ並び出す。この年

いおわりて池つぼにぞ入れける。其節よ
り姫が池と云うなり。

緩坂とておちくる池の水
布をはいだるごとくなりけり

瀧つぼは是、乙姫の下屋敷と
聞きおぼはこれにあり候。

岳の地蔵さん

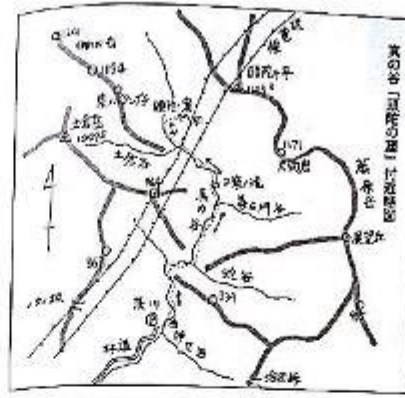
紅葉庵・貴和に伝わる話

政所から岳という高い山への道すがら、
洞体が寛、二つに割れた石の地蔵さんがあ
る。昔、伊勢の炭焼きの嫁おかめが、夫婦
喧嘩の末に夫を殺し、その罪の恐しさに逃
げた。岳の洞の時を越えて地蔵堂の前まで
来て、地蔵堂で懺悔をする。風にもよぐ木
の葉の音、鳥の所にほえ、地蔵堂に向かっ
て「私の懺悔を人に言。てくれるな」と頼
む。おかめさんはその後政所までくだった
所で役人に捕らえられ、金閻羅の仕置き場
で獄の刑に処せられた。おかめさんはお
そらくお地蔵さんの言葉を聞いて自害した
ものと思われるが、その後だれかがそのこ
とを言れんで、大きな石に鍍金された地蔵さ
んを刻んで供養したと言われている。その
地蔵さんは「おかめ地蔵」とか「おかめ石」
とか呼ばれている。

「頭陀の窟」を発見

御池橋の東のボタンブチを本誌24号(98年9・10月)で紹介したが、そこから眺めて気にかかる所があった。

平成8年10月13日に新ハイの山行で奥の平を案内した際、東のボタンブチで大鹿野



を歩いた。正印には頭陀ヶ空から藤原岳へと続く雄大な山塊、その西斜面は白い石灰岩の岩壁を配して、真の谷に急角度で落ち込んでいた。その真の谷のすぐ上の岩壁に黒い洞窟らしい穴が望めた。双眼鏡でみんなどで覗いてみるとやはり洞窟のようだった。位置と地形をじっくり見えて帰り、2万5千の地形図で大体の位置を掌握した。

目を養って沢川から真の谷谷を登り、土倉谷刀取を過ぎ滝を捲いて登ると、左に険しい枝沢が合流した。右に回り込むとゆるい登りに変わり、谷の水は流れから水溜りのようになった。

左岸に炭焼き跡があり、その先に杉が二本茂っていた。右折して急斜面を登る。疎林の中にはシダ類と灌木が咲いた。けもの道を左斜めに登ると、真上に樹間から岩壁が見えてきた。石灰岩の小石が混じった



頭陀の窟

やわらかい土の斜面を登り岩壁の下を右に登ると、突然そそり立つ岩壁が二つ並び、その奥に洞窟が口を開けていた。

入り口の幅は4〜5尺、左右の岩壁の高さは14〜15尺くらいある。上には雑木と灌木がおおいかぶさるように紅葉していた。左の岩壁には手首ほどの太さの大きな蕨が大蛇のようにくねくねとからみついて這い上がり、灌木が茂っていた。さざれ石のような白い岩壁は脆く基部がえぐられている。

真の谷のさざれ石はここから落ちていた。

洞窟までは50分程度か、急斜面を登りつめ洞窟に入ると、奥行き4〜5尺、高さは10尺近くある。浸食激しい石灰岩のこの洞窟は、神秘的であり、霊気が漂っている感じがして、一人でいるとぞっとする。

「正印苑」で「頭陀」を引くと、衣食住に對する食欲をほらいたのける修行とある。昔この洞窟でも修行が行われていたのだらうか。後方には奥の平の東のボタンブチが青空を突いて緑くさびえ、紅葉をまどった明るい山肌が一気に真の谷に落ちていた。

右斜めに約10分登ると、同じような白い石灰岩の岩壁が続く。洞窟はないがすばらしい石壁だ。なお真の谷の炭焼き跡跡の木に赤のビニールテープを二か所巻きつけ、

分岐の目印にしておいた。

(平成8年10月23日歩く)

- ▲コースタイム▼
- 沢川(1時間)二瓶ノ滝(30分)土倉谷合(15分)炭焼き跡跡(10分)頭陀の窟(2時間)沢川
- △地形図▼
- 2万5千川ヶ岳
- 昭文社「44霊仙・伊吹・藤原」
- (後野明)



頭陀の窟入り口 東のボタンブチ

山と自然の本

比良の父・角倉太郎 比良登山今昔ものがたり 2,200円	関西山経の古道山行 中庄谷 直 2,600円	京都丹波の山山行 内田 弘弘 2,600円	兵庫丹波の山山行 慶佐次 盛一 各2,000円	近畿の山日帰り武器 中庄谷直・吉岡章 2,000円	京都 北山百山 北山クラン 各1,900円	京都 北山を歩く①②③ 内田 弘弘 2,000円	京都 洛陽南部の山 山本 武人 2,000円	近江 湖北の山 山本 武人 2,000円	近江 朽木の山 山本 武人 2,000円
------------------------------	------------------------	-----------------------	-------------------------	---------------------------	-----------------------	--------------------------	------------------------	----------------------	----------------------

鈴鹿の山と谷①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿	西尾 寿一 3,200円	大塚山房協会 2,266円	高木 肇夫 2,000円	酒井 昭市 2,800円	増水 進男 3,000円	増水 進男 各2,000円	日本山岳会 1,500円	奔藤清明 1,500円	平井 一正 2,500円	和雄 2,900円
--	--------------	---------------	--------------	--------------	--------------	---------------	--------------	-------------	--------------	-----------

ナカニシヤ出版
京都市左京区吉田二本松町2
電話 075-751-1211 〒606

日本コバ蔵川谷に

幻の「豹ノ穴」を発見

西尾寿一著の『鈴鹿の山と谷』(ナカニシヤ出版)に日本コバの「ヒョウノ穴」のことが載っており、朽真尾の老人が昔遠足で登ったことがあると記されている。この豹ノ穴が気になり、地元の方へ、三人に尋ねたがはっきりしなかった。

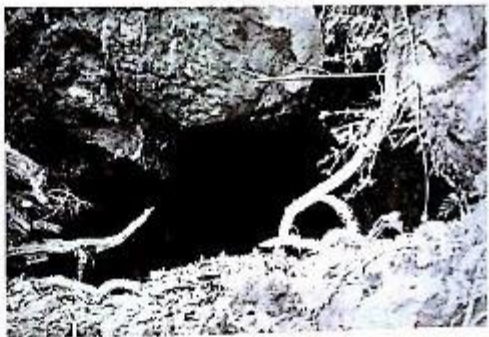
この穴を見つける手掛かりを探している中、八日市の小林君から山口温夫・山口剛共著『アルパインガイド41・鈴鹿の山』(山と溪谷社)に日本コバの豹ノ穴の道標のことが記されていると聞いた。早速拝借して読んでみると、如米寛から藤川谷を日本コバに登るルートの紹介ページで、「25分で右岸に渡り20分で豹ノ穴の道標がある」と記されていた。地形図を見ておおよその位置を確認した。

如米堂ルートをとどり、左岸に渡って伐採された山腹を高登ししながら登ると、後

方には格と不老堂が大きくそびえ、明るく紅葉した美しい山容を見せていた。杉林に変わるると左下から谷が近づき35分で右岸に渡った。25分登ると北谷出合の手前に着いた。右折して北谷とその支谷を探したが、豹ノ穴は発見できなかった。大きな崖面の死体があった。口と目と尻が食い散らされていた。シヤレコウベ付きの鹿の角は異常だ、今年もまた鹿の角が発見できて米君が楽しみだ。藤川谷の周辺と左折道も探したが、やはり穴は発見できなかった。

山口西氏のルートでは谷に沿って登り左岸に渡り、右岸・左岸・右岸を渡って45分で豹ノ穴の道標と記されている。再度探検して藤川谷を40分程度登ると、右岸の伏見地に着いた。左岸にはガレ場があり切り立った急斜面が続いていた。左上の山腹にチェンソーの音が続いていた。濡れた支谷を左

豹ノ穴入り口



に登り、間伐作業中の人に豹ノ穴について尋ねたが、地元の方ではないので知らないと言われた。支谷の源流には岩壁が続き小さな穴はあるが豹ノ穴があるものはない。この谷の北にも支谷がある。山腹を登って谷に入ると左右に岩壁が続いた。その下を探すが穴はなかった。あきらめて谷をくぐると福れ谷に岩場が続き、雑木の谷をくだると左下にうっそうと茂る杉林が現れた。杉林と雑木の境目に約10坪の崖があった。

と見えてきた。奥に神秘的池がある。奥に向かってシャッターを何度も押した。フラッシュの光で池の面にエメラルドグリーンの色が一時見えた。

杉木立ちの中を左側に約3分もおりると登山道に着いた。こんな近くにあり子たちでも気軽に登れる豹ノ穴は、約半世紀もたれも訪れることもなく忘れられてしまったところだった。すぐ上の登山道に「危険」の表示板が立っていた。分岐の杉の枝に赤テープの印を一枚所付けておいた。

登山道をくだって春日神社に着くと、地元の方が境内を掃除されていた。話を聞くと、小学校の遠足で豹ノ穴に登ったというあの谷を豹ノ谷と言ひ、大雨が降ると豹ノ穴は水を吹き出すということだった。



豹ノ穴の奥の池
確認すると豹ノ穴のすぐ下に横穴の坑道があり、左下にも小ぶりの洞窟がある。穴の奥には深く

坑道がびていた。そして豹ノ穴の天井の隅にも横穴が奥深くのびていた。
前回出会った老人を訪ね話を聞くと、現在は永原ダム湖底に沈んでしまった丸居瀬の集落の、北の山腹の小字野野という所に獅子野洞山があった。当時、結山から日本コバの東の尾根を越え藤川谷まで道があり、磁石を牛の背で藤川谷まで運び、豹ノ穴のすぐ上の金尾という所で精錬した。精錬所から通学する子と自分の家の前で待ち合わせ、政所の小学校に通ったとも言われた。銅の精錬に石灰岩を融媒として使ったということなので、その石灰岩を採掘した穴だろうとも言われた。

なお西尾寿一著の『鈴鹿の山と谷』には「この付近には古い磁石山があって、磁石も減っている」とも記されている。
(平成8年11月13日・14日歩く)

▲コースタイム▼

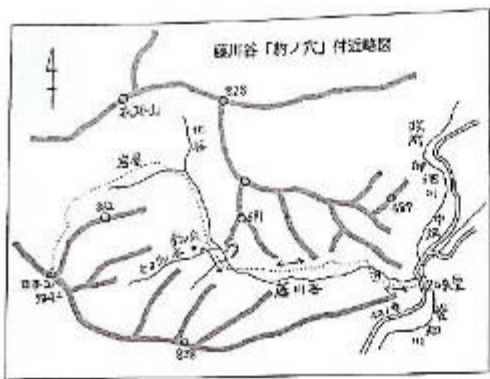
如米堂(35分) 藤川谷右岸(5分) 豹ノ穴分岐(5分) 豹ノ穴(40分) 如米堂

△地形図▼

2万5千1百済寺

昭文社「44 近江・伊吹・藤原」

(石野 明)



左折してその下に香くと、あった。豹ノ穴である。穴の入り口を倒木が覆き、土砂で埋もれかかっている。倒木を除いて土砂の急斜面を穴におりると、洞窟の中は六畳程度の広さ。その奥に幅約1尺、高さ約1・5尺の穴があり、奥は真つ暗だ。チャホン、チャホン、チャホンとリズムカルな音が洞窟に響いていた。ライトを出したが電池が切れていた。薄暗い中で音を聞いていると、目が慣れたきたのか、洞窟の内蔵がぼんやり

筒井峠から

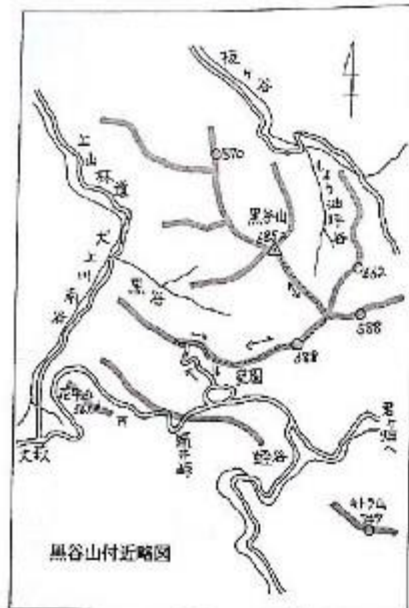
黒谷山

鈴鹿山系の最奥の集落・君ヶ畑に向かう道は狭谷を過ぎると二分する。右折すると君ヶ畑に向かうが、直進すると筒井峠を越え、大塚で犬上ダムにおりる道と角井峠から愛東町におりる道とに分かれる。現在は舗装され筒井峠の正確な位置は分からない。この峠から北東の天狗堂へのびる尾根の中程から北西に派生する尾根に黒谷山(△688・260)がある。筒井峠には遊道道場の「皇園」がある。この皇園から尾根に取りつき黒谷山まで歩いた。ほとんど杉林におおわれているが、登ってから黒谷山へとのびる尾根の北東斜面は植林したばかりで、当分は展望が開け明るい尾根歩きが楽しめる。

皇園の前の広場に車を駐める。山腹には農家らしき家が点在しているが、戸戸は固く閉められ人影はない。管理人も見当たらない。

がっていた。道端からしき板切れが木に取り付けてあるが白く風化して文字は読めない。天狗山か？ 広場から山頂までの道はほとんど消えていた。

杉林をくぐり疎林の尾根のササを分けて登りつめると、前方が開け植林の尾根分岐に出た。右は天狗堂へと続く尾根だ。左折して黒谷山に向かう。尾根の分岐には赤松が一本茂り、掃りの目印になった。左斜面は杉植林、右は植林して間がない明るい平坦な尾根に植道が続いた。右には天狗堂からサンヤリと続く稜線が見え、ウグイス・カッコウなどの小鳥の声を楽しみながら



黒谷山付近略図

腰を下ろす。谷から心地よい涼風が吹き上げ、鳥の声と山の静寂を楽しむながら昼寝でもしたいところだ。引き返し「見返りの松」で昼食をとり、尾根道を直接おろす。大塚にくだる途中の左に惟高親土の御陵があり、入り口の右

ない。どうしようかと迷ったが中を通らせなくてもいいことにした。広場から左の道を登ると戸戸が開まった家屋が続いた。家屋の横から樹林の山に向かつて地這の林道が続いていた。道沿いにはコアジサイの青紫の花が咲き、ウグイスが鳴いていた。左から右に回り込むと尾根の広場に着き、道が分かれば右折して山腹の林道に入る。林道の終点に着くと広場の一角に朽ちかけた屋敷付きの休憩所がある。その先に「見返りの松」が大きく茂っていた。道標は天洋山と支那の方向を示していた。

道が二分したが右折して山腹の道をたどり尾根に出ると、左から尾根道が合流した。尾根には広い切り開きの道が続いた。左は杉林右は雑木の道をゆるくくたつてから登りつめると広場があり道が消えた。前方に杉林におおわれた688mのピークが望め

どるが、はつきりしたピークがなく黒谷山がはつきりしない。少し生え込んでくると前方の植林の中に赤松が点在するピークが望めた。登りつめると黒谷山の山頂だった。

左斜面は杉林、右にのびる尾根には枯れたカヤ原に植道がほとんど育ち赤松が点在していた。夏草が茂る時期には隠れてしまいうような二角点だ。植林の間から北西に展望が開けた。真下に犬上ダム、その先には大上川溪谷から湖東平野が春霞の中に広がっていた。北には板ヶ谷を挟んで溝谷山・サンヤリ・天狗堂と植林の山肌が目立つ山塊だ。眺望を深しんでから植林の中に



黒谷山の稜線

た。踏み跡を探しながら尾根をたどると、疎林の中はササが疎らに茂っていた。登りになると赤松が続き雑木林を抜けると688mの山頂に着いた。灌木の山頂は枯れたカヤ原が広がり、北西に展望が開けた。これからたどる樹林の尾根の上にピラミッド型の天狗堂・右奥には御池活から藤原氏の青白い稜線、その前縮の山並みはヒキノ・黒山・東山と続き、植林の濃い緑と若葉の山肌、後方には日本コバが大きく盛り上

(平成8年6月16日歩く)

- △コースタイム▽
- 皇園(25分) 見返りの松(25分) ピーク688m(20分) 尾根分岐(30分) 黒谷山(1時間30分) 皇園
- △地形図▽
- 2万5千1百路寺
- 昭文社「44霊仙・伊吹・藤原」
- (岩野明)

観光バスなら 確実第一の
太陽観光開発株へ!!

- ・小型 (20人・24人)
- ・中型 (28人乗り)
- ・中2種 (45人乗り)
- ・大型 (55人・60人)

いずれもサロンカーからデラックスまで

スキーバスもあります

〒578 東大阪市津池本町1-20 オカダビル4F
電話06(745)3911・FAX 06(745)3983
(夜間・電話06(946)0816・FAX 06(945)9044)

ササユリの咲く

明神山から白鹿背山

八咫街道を水鏡寺に向かって進むと、左愛知川を挟んだ山裾に東近江開閉所の鉄塔が林立している。その上に2等三角点白鹿背山(東雲寺山・755.8m)がそびえている。このピークから南東にのびる尾根に明神山(707.7m)がある。以前は雨乞いが行われた山で、山頂には小さな社と八咫王雨宮明神社の石碑がある。古い参道を登り明神山から尾根を白鹿背山に向かうと、707.7mの山頂から整頓された送電線の巡視路が続く。ササユリが咲き乱れる尾根から眼下に深草野が大きく広がっている。気軽にのんびりと家族で楽しむハイキングコースとしては最適だ。

八咫街道の421号線を水鏡寺に向かう。山上で左折して愛知川の紅葉橋を渡り、左折して下流に向かう。吉本ボールの資材置場を左に見てすぐ右折して細い道を進む。

左に曲がると右の山側に小さな流れがあり、横に二体の石仏がある。その前の広場に車を駐めた。

山に向かって斜めに登っている林道が古い参道で、この道を登る。左に送電線の鉄塔を見ると荒れた地帯になった。その坂道を登ると道が分かれた。左折して雑木の急斜面を折り返し登ると雑木の植林に変わり、真上に明神山の緑が望めた。関電の反射板を左に見て登りつめるとカヤ原の広場に着き展望が開けた。後方には愛知川が白い帯となって扇状に広がり、湖東平野に消えていた。

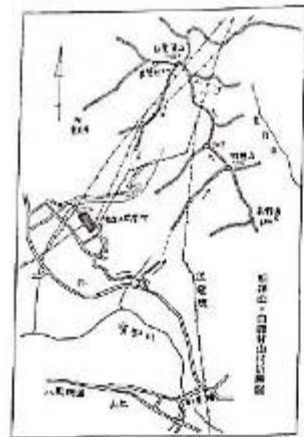
植林の中の参道は夏草におおわれているが、その中にしっかりと道が続いた。急斜面の登りに変わると、左右にササユリの淡紅色の花が咲いていた。鉄製の赤い鳥居をくぐり、うっそうと茂る森の中を登りつ

明神山山頂の八大龍王雨宮明神社



め明神山の山頂に新いた。杉木立ちの中に小さな社があって神が供えてある。その前に八大龍王雨宮明神社の石碑が立っていた。横には石積みで橋穴があり入り口に小さな鳥居がある。枯れ木がその穴に差し込んであり、まるで角を持った龍が口を開いて橋穴からはい出しているように見えびっくりした。

ひと休みして、尾根を左折して707.7mの山頂に向かう。左斜面は雑木の植林、右は



自然林が続く。踏み分けをたどりながらゆるくくだって登りあすと、送電線の巡視路に飛び出し、707.7mの山頂に着いた。西端に出ると大きく展望が開けた。巡視路は急斜面を裏下の林道に続いていた。

南方には鏡子ヶ口山系・カクレグサ、奥には雨乞山・細間山、奥三山は長い裾を湖東平野に落としていた。広い湖東野は霞の中に見える。

山頂に引き返して白鹿背山に向かう。整備された巡視路をたどる。急坂にはアラスチックの階段が続いた。ピークを二度越えると、植林の尾根にはササユリの花が咲き、浅い谷から右上の鉄塔に向かって道が続いた。道の両側と植林の中には淡紅色の大きなササユリの花が咲き乱れていた。まるで

乙女が頬を染めうつつむいているようだ。何回も立ち止まり、写真を撮る。これまで鈴鹿を何年も歩いているが、こんなにたくさんのササユリの花を見るのは初めてだ。植林が2層程度なので当分はこの花を楽しめそうだが、木が成長するにつれて消えてゆく花でもある。登りつめ右折して鉄塔の下の広場で断崖を築きながら昼食にする。

南方には日本コバから派生する尾根の先に雨乞山・細間山・奥三山が望め、足元からは植林の急斜面が望まへへと落ち込み、右には歩いてきた尾根がもこもこと登り上がりを見守っていた。後方には鉄塔の奥に白鹿背山が望めた。

食後、白鹿背山に向かう。ゆるい登りをたどると、左右にどこまでもササユリが咲き続いた。鉄塔を通き山頂が目の前に見えることまで分かれた。右にとると2等三角点白鹿背山の山頂に着いた。植林が育ち展望は良くない。左折して愛知川の展望台に向かう。支尾根の植林をくぐるとなおもササユリが咲き、カヤ原の広がる展望台に着いた。古い橋は切り倒され、新たにセメントで枠組みした根柢付き説明板が取り

き続いた。鉄塔を通き山頂が目の前に見えることまで分かれた。右にとると2等三角点白鹿背山の山頂に着いた。植林が育ち展望は良くない。左折して愛知川の展望台に向かう。支尾根の植林をくぐるとなおもササユリが咲き、カヤ原の広がる展望台に着いた。古い橋は切り倒され、新たにセメントで枠組みした根柢付き説明板が取り

付けであった。眼下には広大な湖東平野が箱庭のように広がっていた。

山頂に向け引き返し「展望台まで200m」の道標の所で右折し、巡視路を右折すると、雑木の尾根に道は続き、鉄塔を二つ過ぎると右斜面は植林帯になった。眼下に湖東平野が広がり、平尾の集落の上の森に白鹿背山と鏡子ヶ口山系が望めた。分岐で右にとり巡視路をくだる。

植林の尾根にはノイバラやオカトラノオの花が、林道におりるとホタルブクロ・ワツボクサ・ミツクグミの花が続いていた。東近江開閉所の道路に着き、左折して開閉所に向かうと左の山側に遊歩道がのびていた。たとえ開閉所の上を通り舗装路に出た。山頂の道を左にたどる。

(平成8年6月27日歩く)

▲コースタイム▼
 登山入口(20分) 分岐(20分) 草原広場(30分) 明神山(20分) ピーク707.7m(40分) 白鹿背山(20分) 展望台(50分) 林道(30分) 登山入口
 ▲地形図▼
 2万5千1:10,000
 (登野明)

石上神宮から 大国見山登山 (天理市域)

コースは①から⑧まで(⑨は山頂)。⑩は山頂からの眺望。⑪は山頂からの眺望。⑫は山頂からの眺望。

① 天理駅(天理市域)

天理市が高峰山・龍王山に続いて最遊准標し始めた大国見山は、桃尾の滝、バス停から1時間で登頂できる498mの山だが、バスの便が少ないので天理駅から歩く。

天理駅から東へ繁華な商店街を抜けて天理教本部前を通り、少し南へ行けば「山の辺道」の起点となる石上神宮へ入る。

② 石上神宮(布留町)

大正屋をくぐり参道を行くと重文指定の立派な風格の鐘楼門が囿る。鎌倉末期の後醍醐天皇の即位儀の建立で、氏子有事の際に撞いたという説は今はない。門をくぐると水保元年(1181)に白河天皇より寄進されたという、もと宮中神祇寮の国家的拜殿が南面する。本殿がなか

中村敏文

天明初期までは石上の諸神を奉斎していた後醍醐天皇の御願である。

白木の流造の堂々とした本殿は大正二年の完成で、昔から神剣御霊は拜殿後方の禁足地の上十深くに鎮まっていたと語られていた。

明治七年に禁則を破して禁足地から神宝を発掘し、神庫や飯本殿に奉斎していたが明治末に本殿建築を始めた。

大正二年に完成した本殿には三振の剣の御魂を神格化した石上の三神を奉斎する。

- (主祭神) 布都御魂大神 神武天皇が大和立定に用いた平国之劍(御霊)
- (第一相殿) 布留御魂神 徳速日命が天神から受けた十種神宝の一つ八咫鏡
- (第二相殿) 布都御魂神 素戔嗚命が八



呼ばれる落差9mの小滝で、滝周辺の石造物は古くからの行場を物語っている。滝近くの岩肌には彫りように浮き出た三尊配置の不動尊像は、気迫に湧ちあふれた鎌倉中期の彫刻と評価されている。覆堂内の細い剣を斜めに構えた不動石仏は、後村上天皇の正平二年にあたる北朝の貞和四年(1354)の銘がある。年号銘はないが「奉起立 行経」銘の如原輪相並石

仏も室町初期の彫刻と推定される。桃尾の滝周辺はいろいろ休憩所などは整備されたが、歴史化した古い施設が散見していつせ、かくの隠跡地を汚している。文献によると平日は勝地として遊人が立ち入っている。
『続拾遺集』には「今もまた行きても見はや右の上 ふるの滝つせ跡を尋ねて」と後醍醐天皇の歌、「古今集」には布留を訪れた仁明天皇の供をした遊人の歌もある。
松尾西原も滝を訪ねたと『笈の小文』にあるが、「大和名所図会」には「飛鳥三反ばかり、白虹紅雲をうがってそそぎ、寒月を誘うて来る」と絶賛してある。



電福寺跡

室町時代には寺領四町石を有し、桃尾寺とも言われたが、応仁の乱後は寺勢衰えて江戸幕府の朱印は百石となった。
増山家所蔵の「桃尾山縁起」には東西十町、南北六町、坊敷十六と記され、滝付近にも流不動堂、山手には本堂・阿彌陀堂・護摩堂・惣門と宝光院など七院が描かれている。
江戸後期には宇治方の安楽院など四院、行人方の阿彌陀院など十二院というが、

③ 桃尾の滝(流本町)



石上神宮から2.7km、天理駅からは5kmの桃尾の滝。バス停で右折して山に向かう。谷川沿いに400mも行くくと桃尾の流で、道半ばの谷を隔てた山腹に、流本町流本の旧無指定村社の石上神宮がある。
桃尾の滝は桃尾山麓にかかると布留滝とも

城大蛇と戦った大形新剣。神庫にある宝物の七支刀(国宝)は百済王が倭土に献上した養和四年(1114)と東吉の年号がある。
式内の名神大社で平安時代の神位は正一位、明治の官幣大社の石上神宮、神社森のすばらしい境内を抜ける「北山の辺道」に入り、影姫の歌や万葉集に詠まれた伝承の布留の高橋を渡ると、「山の辺道」とは反対に布留川沿いの布留御魂を東へ伝う。



大國見山山頂

慶応寺の福徳寺は五人となった。昭和五十年代には鐘樓教が阿彌陀堂跡に大親寺本堂を建立している。広い寺跡には龍福寺隆盛時に建立された鎮石・室町時代の石造物が点在している。

⑤ 大國見山(498m)
大親寺から大國見山への分岐まで谷筋の旧道だと300mほどだが道行不能で、左へ急斜面を回る傍道道を500mほど上がる。

分岐から東へ山頂まで500mほど緩だが木の根が出たりしてかなり急坂のところもある。山頂付近は大小の懸崖が点在し、古代は山頂が信仰の対象であったことを物語っている。

天理市域は五分の三が山地で大國見山は高峯山・竜王山に次いで高い。10分四方ほどの狭い山頂は西方と北方の展望がよく、赤松の根元には市販されている神頼ほどの小祠がある。

山頂から東への山道が多くなってみたが行き止まりで、西へくたさる懸崖の多いスリルのある北側の道をくだる。二又路になった分岐へ戻り幅50m前後の山道に入る。

杉林を植林した山の中腹を伝う油断できない道だが、岩屋町東はずれの高瀬街道の旧道まで40分程度でたどり着く。

⑥ 岩屋の高瀬街道(高瀬町)
高瀬街道は大和盆地北郡と大和郡原を結ぶ古くから開かれた東西の道で、標本から高瀬川沿いに菅原・堂ヶ谷の集落を通り、外輪水を登り夜時を越えて福住に至る。

近代になって福住へは右衛門街道を拡張したり新道をつけたりしてバス路線が開設した。一方高瀬街道は高瀬川沿いに遺棄さ

れたが、勾配を緩和して大きく池曲している。

高瀬街道の菅原の中ほどに伊勢への近道を示す、「大神宮」「右いせ 左ささ道」と延喜三平(一七九〇)銘の道標がある。

高瀬街道に入り西へへきも行く右手に弁財天がまつられ、左に「郡能」の造り酒屋の大きな古めかしい家がある。

春日神社への三又路の右側に菅原の願屋仏、神社下には薩摩宗の深心山本願寺がある。岩屋の上に構築された春日神社は春日四神をまつる岩屋の氏神である。

三又路へ戻り高瀬街道を西へくたると、右側に岩屋町公民館があって岩屋橋へ行く。

⑦ JRR標本駅へ

岩屋橋から標本駅へはほぼ直線の2・8kmと天理駅へ戻るより半ほど短い。

途中に和爾氏の氏神として創祀された和爾下神社に立ち寄る。重文の本殿は桃山時代建立の切妻造の文化財である。近くに柿木入麻呂の墓と室町時代に築造の歌麿がある。

山の本紹介

西記考一考
層峰春秋

- 発行所 立花館山の会出版局
- 発売元 ナカニヤ出版
- 1854円(書籍発売元)

世のなかには奇妙なことが沢山ある。どうしてこんな奇妙なことが誰の注意も引かずにまかり通っているのか不思議でならない、といったことがよくある。

社会の真只中で活躍中の人には、このことには気がないことが多く、世の中を半身で観ている人、社会を垣から観察している人にはよく観えていておかしくてたまらない。(中略)登山界もその例にもれず、奇妙なことが伝統的に続けられていたり、組織からの通過だといって奇妙なことを目撃的に受入れ実行してたりする。

(著者「渡邊啓一」はじめに「よりの」)
集められた六十九編の文章は、そうした観察の目で「ニコロジ」は雑念でなく実態である「という主義が、『渡邊啓一』について山岳・社会・動植物などを綴ったものです。



登山・ハイキング(野歩き)
バス時刻表・近畿版

- 発行 普及新社
- 1200円(書籍発売元)

JRの時刻表は各社のがあり、関西の主な私鉄は自社の時刻表を発行しています。また関西地区のJRと各私鉄全線を網羅した時刻表として「KATY(かつて)関西圏私鉄・JR時刻表」(八峰出版)が発売されていて、「電車」の時刻を知るには大変便利で、私たちハイキングファンは従前から利用してきました。

ここに紹介するのは近畿の「バス時刻表」です。それも登山・ハイキング専用の時刻表になってうれしいかぎりです。

電車の駅から登山口へ、下山口から電車への駅へのバス時刻を調べるにはずいぶん苦労された人も多いでしょう。本誌でも近畿を巻末に「バス時刻」を載せていますが、この近畿の「バス時刻表」は役立ちます。

発売中の野年冬春より増刊・渡路方面など、エリアも拡大されました。ぜひお手元に置かれ、ハイキングの計画や山行のよき友として活用ください。

XCスキーで冬の池ノ平湿原の樹木と霧水を
楽しみませんか

●X初習者コース
●XC初心者のコース
●XC上級者のコース

●無料のシャトルバス(新泊者のみ)
●安心のツラツラコース
●雪の絶景が楽しめます

1泊3食付き 11,000円～13,000円
信濃本線小原駅からJRバス高野高原行き、終点から雪上車(10分)

高峰温泉 〒384 長野県小諸市高峰温泉
電話 0267-25-2000

河内源氏の里を訪ねて

松永恵一

委井八幡宮「河内名所図会」



河内源氏
源氏代、世に多田満仲として知られる。清和源氏の祖とされる貞純親土の嫡孫にあり、諸國の受領を歴任し、鎮守府将軍に任ぜられた。のち摂津守となり摂津國多田莊を本拠とし、多数の郷党を養って武士階級を結成した。満仲には武略に長じた源光・源親・源信等の子があり、はやくから都に出て、武力をもつて摂関家に奉仕していた。丹波大江山の源香雪子と邂逅した結果有名な源光は多田莊を継ぎ摂津源氏を稱し、源親は大和源氏の基を開いた。源信は、寛仁四年（一〇一〇）に河内國古市郡委井里の香田峯と呼ばれるところに館を構えて本拠地とし、河内源氏の基を開いた。委井里は現在の河内郡古市町の東部地区に位置する委井。

馬盗人

源信が東國からよい馬を買った。送られてくる途中から馬盗人がつけねらっていたが、警戒が厳重で盗むことができなかった。馬が到着したことを聞いた源義は、霖雨の中を父の家にやってきた。源信は、「今夜は暗くてわかるまい。明朝見て気に入ったらすぐ連れて行け」と言った。喜んで源義はそのまま情になった。その夜、馬盗人が寝ている源義を起こしませず、盗人を追った。源義はさわざい気がつくこと、これまた一人て賊を追いかけた。父は子が、子は父が、かならずあとを追って行くこと信賴していたのである。この盗人は、関山（遠坂）まで連れ、こゝまでくればもう大穴と、ひとくちも走らせず、水たまりをバシバシと歩かせていた。あたり一面は真っ暗で何も見えなかった。水音を聞いた源信は、「形もあれだ」と叫ぶ。その言葉が終わらぬうちに源信が、馬盗人は見詰まされ馬だけが残った。帰宅した二人は、あれこれ言わないでもこのように寝入った。翌朝、源信は「馬を持っていけ」とだけ言った。馬には鞍までつけてあった。

（今昔物語集）巻二十五第十一話

通津寺村近である。

「尊皇分派」は、源信を「源氏一流正統」とした。清和源氏の嫡流は源光であり、その三孫である。しかし、彼らは京都に慣れ親しみ、貴族の生活を送っていた。これに對して河内源氏は源信の子源義、源義家と武士としてめざましく活躍し、「武勇の家」の榮譽をほしいままにしていた。源義の嫡男が義家であり、七歳の春に石清水八幡宮の宝剣で元服し、「八幡太郎」と号した。前九年の役に父に従って武功をたて、「勇絶倫にして、騎射神の如し」とたたえられた。後三年の役は、名將八幡太郎義家の名を、広く天下に知らしめた。やがて義家は「天下第一武勇之士」と称せられ、白河院政をささえる重甲力の中核となった。

源義家と阿部宗任

前九年の役で、阿部宗任は討たれた。弟の宗任は降人となり源義家の嫡男義家のもとで、一日中そば近く仕えた。

ある日、義家は宗任を連れて出かけた。広い野を通り過ぎる時、狐が一匹走った。義家は追いかけた。射殺するのは可哀相だと思ひ、左右の耳の間をかすめるようにして、後ろから射た。矢は狐の首に突き刺さり、狐はその場に倒れた。宗任は狐をつかんで言った。「矢も刺さっていないのに死んでいく」と。それを見た義家は、「おじけづいて死んだようになっていたのだ。殺すまいと思つて射当ててはいないから、すぐに息を吹き返すだろう。その時放してやれ」と言った。宗任が矢を取ってさし出したところ、義家はそのままうつばに差させた。これを見た他の家来たちは、「危ないことをなさるものだ。降人としてやってきたとしても、もとの恨みは残っているだろうものを。すきをみせたまま矢を差させるとは危ないことだ。宗任に思い切つて殺害しようという気があったらどうするのだ」と非難した。しかし義家は神にもまがうほどの超人的な武勇の人であったのだ。

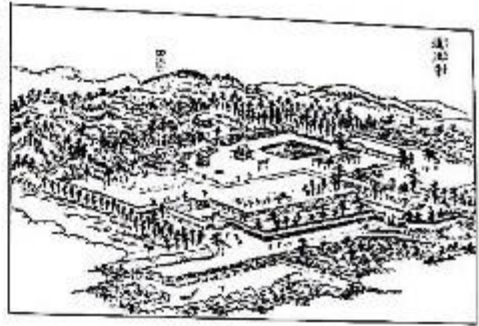
（古今事類考）巻第九 武勇

義家の武勇を伝える話はまだ多い。

「家傳秘抄」は「おそろしき」武士として義家を驚かしたと述べた。實の秘は深山にはなべての鳥は扱むものか同じ源氏と申せども八幡太郎は怖ろしや義家は武勇だけではない。知略に長じ、和歌をたしむ風雅の人でもあった。この義家の子孫が頼朝で、鎌倉幕府を開く。

泥樹地蔵の話

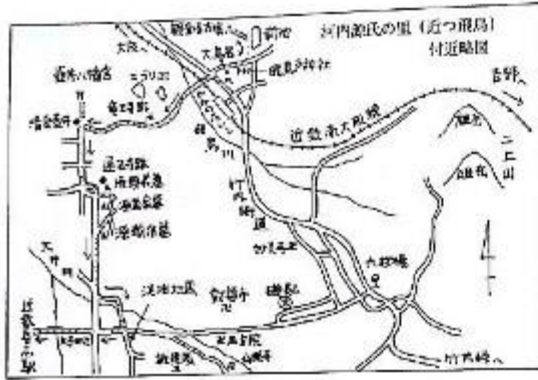
喜志の里に一人の女が住んでいた。その女には一人の子どもがいた。その子どもの身体に腫れものができたので、女は心配しているうちに手当を加えたが、どうしても治らなかつた。女は仏にすがるとしかないと、村はずれの蓮池の傍らにある地蔵尊に願をかけることにした。毎朝女は地蔵尊にお参りし、ぬかずいて一心に祈った。ある日のこと、地蔵尊が女の前に現れ、「我は長らくこの蓮池に住まいしていたが、地上に出されてから久しく池に帰ることができないでいる。せめて池の泥を身体にかけてくれると池へ帰ったような気がする。汝の願いをかなえてやるから、私の願いもかなえよ」と、言った。女は地蔵尊の言葉を聞いて飛び上らるんばかりに喜んだ。蓮池の泥をすくって何度も何度も地蔵尊にかけた。我が家に帰ってみると身体一面に腫れものかき、見るのも辛くなっていった子どもの身体から、腫れものが嘘のように消えていた。女は地蔵尊の靈験に感じ入り、毎日池の泥を地蔵尊にかけお礼をした。この後、腫れものができたり、痛い事があると、この地蔵尊に泥をかけて祈願するようになったという。



通法寺【河内名所図会】

コース概観

今回のコースは、近つ飛鳥の地を訪ねる。百済の尾支王をまつる飛鳥戸神社で古代に思いを馳せ、先土葬時代の新池遺跡、終末期土壇として名高い観音塚古墳を見学し、河内源氏の里並井の並井八幡宮、通法寺跡、源氏三代の墓に詣り、兵達の栄華の跡をしのび、遺跡あまたかな泥掛地蔵にめぐみ、旧い家並みの軒先から二上・葛城・金剛の山並みを眺めながらのんびりと歩く。



義が前九年の役に出陣する際、石清水八幡宮に戦勝を祈願し、凱旋の後、康平七年(1064)に、邸の東側に八幡神を勧請した。源氏の子孫とされる五代後醍醐天皇吉の出家後、元禄十四年(1701)には並井龍興の孫貞正一位を受けている。将軍上皇の時に龍興が加えられている。義

近鉄南大阪線の上ノ本十駅下車。雑居・雑居二つの峰からなるやわらかな姿の二上山が出現してくる。この地蔵一帯は近つ飛鳥と呼ばれる。難波に都のあった時代、奈良盆地南部の一地方である飛鳥は「近つ飛鳥」と呼ばれた。のどかな田園風景が広がるこの地を半島から渡ってきた人たちは「アンシユク」(安住の地)と名づけたという。

駅前前は竹内街道。白壁瓦葺き、格子に長窓門といった重厚な落ち着いた家並みが続く。最初の四つ辻を右手に折れる。内田康夫は「明日香の皇子」の最後の舞台に設定した。「道跡を踏くように立つ大鳥居」の下をくぐり家々がとざれたところ。「低い石段を上がったところ」に、狛犬を前にして小さな建物が見える。鳥居の立派さからすると、意外なほどちっぽけな社だ」と評す。「延喜式神名帳」では名神大社。最高の位階に置かれた社が、龍徳烟の番小屋のような築落した姿で今に伝える。祭神は百済の尾支王で、その子孫である飛鳥戸一族の氏神としてまつられていた。尾支王は雄略天皇の時代に大入ともにも渡来しこの地に住した。子どもが百済に帰り、のちに百済の皇太子(508年と592年)となった。

家が愛用したという短冊(威州丸「福無の鏡」(重要文化財)や天光丸の太刀(重要美術品)などが伝わる。境内には樹齢八百年というクスノキ(樹天然記念物)がそびえている。

通法寺跡は並井八幡宮のすぐ東南にある。長久四年(1043)、頼義が頼朝中に千手観音の像を給い寺を建て、この地に観音堂を建立したと「通法寺興廢記」は伝える。並井八幡宮の神宮寺であった通法寺は、明治六年(1873)虎伏殿が廃寺となり、いまはわずかに山門・鐘楼・礎石が残るにすぎない。鎌倉時代の本堂のあった場所には「源頼朝御厨下遺蹟」が残る。頼義は本堂の下に葬られたと伝えられ、このような葬法を墓室形式という。明治の廃寺までは、この地に二間四方の廟殿が存在した。墓前にある行燈一對は元禄の再建の時に柳沢古保が寄進したものである。

父の頼義、子の義家の墓へは門の前の道を東に1000ほど進み、丘殿を登って行く。三代の中でも一番大きい「八幡太郎」義家の墓。500坪ほど離れて頼朝の墓がある。いずれも円墳状の家である。

この地に立って俯瞰すると、眼下に石川が北流し河内野が開け、南方には河内と大

あたりを眺めると備前朝が山の斜面から頂上まで一面に続き、ビニールハウス状におおわれている。神社の前をさらに上ると新池に出る。このあたりは先土葬時代の遺跡。左上を仰ぎ見ると観音塚古墳が見える。急な階段を登る。南河内が一望できる絶景の地に、石英安山石を多量に切って組み合わせた七世紀前半の土壇がある。前室の東壁の落石は江戸時代のもの。

来た道をくぐり河内源氏の里へと向かう。並井の集落へは、竹内街道、近鉄南大阪線、飛鳥川を渡って、龍徳烟を左右に見ながらゆるやかに登りくだる。途中地主寺跡を見らる。ニゴリ池付近から巨大な塔心礎が出土し河内飛鳥寺跡と呼ばれている。

まもなく並井八幡宮前の道に出る。険しい石段の手前側に「清泉並井」がある。こんな話が伝わる。前九年の役の衣川城攻めで頼義・義家の父子は飲み水の欠乏に悩まされた。頼義は石清水八幡に祈を以て弓削で岩を穿つと清水が湧々と湧きたし、環を測して勝利を得た。この霊水を甕に入れて持ち帰り井を掘り底に沈めたのがこの井戸だという。井戸の水を飲むと病が治ると言い伝える。

石段を登ると並井八幡宮が鎮座する。頼和をつなぐ竹内街道がある。河内国府は北方6*の地。ここは並井の里はまたとない要衝の地であった。

南に歩くと泥掛地蔵がたまたま。太子四ノ辻交差点のすぐ東の地。一間四方の小室の中に、高さ1・8mの鎌倉期石仏が安置されている。製作年代は平安時代中期以降と推定されている。

西にしばらく歩くと近鉄吉志駅に出る。

コースタイム

- 近鉄河内野橋駅(電車・近鉄南大阪線約30分) 上ノ本子駅(10分) 飛鳥戸神社(5分)
- 新池遺跡(5分) 観音塚古墳(30分) 並井八幡宮(5分) 通法寺跡(5分) 源氏三代之墓(10分) 泥掛地蔵(30分) 近鉄吉志駅(電車) 河内野橋駅
- 費用
- 近鉄河内野橋駅〜上ノ本子駅 420円
- 電車〜近鉄河内野橋駅 380円
- 地形図 2万5千〜大和国
- 昭文社「52巻城原・下山」
- 問い合わせ先
- 河内野市役所 まちづくり推進課
- 0739(58)1111

奥美濃最奥の孤高の山

みょうじん やま

明神山

中級コース (★★★)

山本 和夫

岐阜県の板取村と根尾村との境界にそびえる明神山(1141m)は奥深い美濃の山のうちでも一級の奥地にある。地形図に山名のない「ドウの天井」(△1327)が登るためによく判別した大きなピークが明神山であった。

アプローチは国道21号線を大垣から岐阜へ向かって走り、大垣市と岐阜市の中間にある穂積町で道路案内板が左へ「本巣」と表示しているところを左折する。後はまっすぐ北へ向かって一直線の道が続く。

根尾村へ入り穂積の町はずれで大須へ道路案内板に流し根尾東谷川に沿った道となる。往時は狭い道だったと思われるが、上大須ダム建設のため改良されていい道に

なっている。

ダムの周遊道路に入り根尾地点にコゲ茶色の二又谷橋の大きなアーチが見えてくる。橋のたもとに駐車場もある。ここまで21号線からは、切めての道でもあり約3時間ほどみておこう。

見上げると東方に大きな山が見える。これが明神山だ。まよりはこの駐車場で車中泊とする。私の山旅の楽しみの一つであるワイン付き夕飯をゆっくり味わう。

朝、秋11月頃なら野狐の声で起こされることになる。荷物は最小限に軽くする。二又谷橋より右の谷へ入る。川原におりて上流へ向かうが、3月から4月初旬までなら残雪がいっぱいでどこでも気ままに歩くことができる。

300m前後進むと二又(十字の嶺のようなところ)に着く。右側は岩盤から滝となって落ちているが水量は少ない。左側は東河内谷で水量も多い。登路は樹木の茂った正面の沢で水量は少ない。

ゴロ石が階段状に続いている。登る道を選んで登れば少しは楽かも知れない。30分位進行するとまた二又となる。右の谷へ入っても登れるが、私は左の谷のほうがやさしく思えたのでそちらに入る。この近りから

駐車場から見た明神山



谷は残雪で埋めつくされ登りやすくなる。途中一か所5分位の湘れ滝があり、右側の斜面を直上し左へトラバースしてまた谷にくだる。後は上流をながけて雪の巻留を根気よく登ることになる。

やがて杉の木が現れはじめる。古い林道跡に出る。幅は3分位くらいだが長い年月手入れもされず崩れ放題になっている。やれやれといったところで一服する。

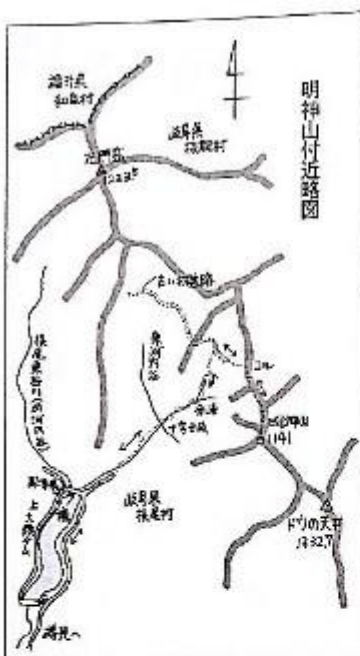
この古い林道は15分位で終点となるが、展望もわりあい良く、雑木の間から下のダ



明神山山頂付近から見た古い林道跡

ムや駐車した自分のまきまき身。西方面は能郷白山がゆたりと横たわり、右へくたつたあたりが根尾と岐阜の県境見境だ。旧い林道終点からは左の稜線をめざして灌木のやぶを登る。雪がやわらかいと足がもぐもぐたびれるが、それも15分も頑張れば稜線に出る。東斜面は急なので注意したい。南側を見ると明神山が大きく迫ってくる。少し南へくたるとコルに着く。

ここからいちだんと急坂になった尾根を登る。途中に老木の杉や檜の茂る箇所があるが、そのためか残雪の積りで雪が消えていることがある。そしてわずかではあるが踏み跡さえ認められる。今は通る人も無



いのだろうが、昔はこの道を利用した山人たちがいた。ここに馬を馳せると貴重なものを見つけた喜びが湧いてくる。

問もなく頂上だと思つて何となく体に入りが入って期待に胸がふくらむ。傾斜がゆるくなり平になった所が頂上であった。杉の木が二、三本ある。見晴らしは良い。さらに南はるかに「ドウの天井」も望まれる。先程見えていた駐車場の私の車も下方に見える。どこを向いても雪覆たる山並みばかりが現れいっばいに広がっていた。

平成8年3月24日歩く

特選コースガイド②

大峰

おおみね
大峰前衛の秀峰

百合ヶ岳(大所山)

中級コース(★★★)
金谷 昭

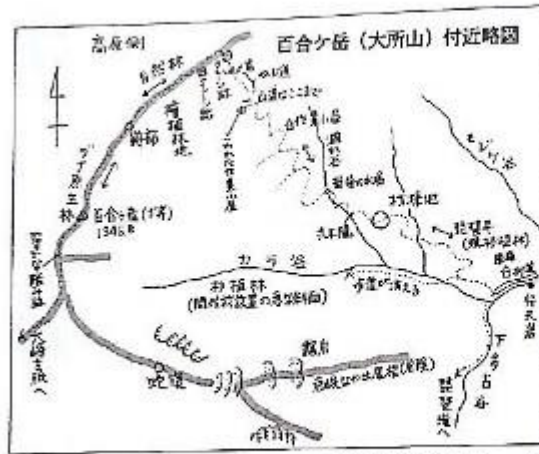
大峰山脈の前衛の山は、主峰に比べて登る人も少ないが、それだけに荒れまわっており、登る者に自然の良さと静寂を満喫させてくれる。

百合ヶ岳(1346・8m)は別名大所山とも呼ばれ、大峰山脈の五番目と今宿跡間の越えカッギ行者の南方から北東に派生する支尾根の末端付近にある。吉野川支流の高原川と下多古川に挟まれた川上村高原の南にそびえる岩峰で、国土地理院の地形図に山名記人もなく登る人もまれな、いわゆる不遇の山である。中腹付近までは杉の植林帯となっているが、山頂や稜線付近は手つかずのブナ原生林が残っており、登る者を引きつけるものがある。

百合ヶ岳へは奈良交通バスにて「下多古十郎」下車。このバスは運行本数が少ないのであらかじめ調べておこう。下多古川沿いの舗装された村道を爪先上がりになり歩き、下多古集落を過ぎ村道終点までつめる。途中、左岸に渡りシクサクになった所の岩場は、上下の対道を利用したロック・クライミングの練習場となっている。また終点手前には弁天岩があり、その上には弁天岩がまつられ村ひとの信仰を集めている。村道は最後まで舗装されており、終点付近のゆるやかな台地は雑草とよばれ、かつて集落が存在していたと言われているが、今は杉林となっている。

登山道は林道終点の車庫の前から右に入るが、道標はなくテープのみである。なおマイカーの場合、村道終点には林業作業車の転回場所になっているので駐車は遠慮しよう。終点手前の道標にも十分注意し車をスベスベする。ゆるやかな杉林の台地を5分程歩くと分岐がある。左のカラ谷沿いの道を見送り、折り返す。なおカラ谷沿いの道は途中で消えている。登山道は袖道でよく踏まればはっきりしている。小さな尾根の方を歩きながら15分程登ると伐採地の明るい所に出る。

ゆるやかな杉林の台地を5分程歩くと分岐がある。左のカラ谷沿いの道を見送り、折り返す。なおカラ谷沿いの道は途中で消えている。登山道は袖道でよく踏まればはっきりしている。小さな尾根の方を歩きながら15分程登ると伐採地の明るい所に出る。



期待していた稜線上の踏み跡はない。高原側はササの繁茂した原生林となっている。稜線の目印にテープを付けておく。

これより下多古側の楡植林と高原側の原生林とのササやぶの境界に沿って西に向かう。原生林におおわれた百合ヶ岳山頂が初めて見えてくる。いったんくたり、さらにコブを登り越した頂上手前の鞍部からは好

ましいブナの原生林となり、下生えのササやぶも疎らとなり、かすかな踏み跡も出てくる。

車上は小広の空地となっており、三等三角点及び一等三角点と埋まっている。ブナの原生林の木の間に大所山脈・台所山脈が見える。手前には勝山山脈が見えるが、中でも庄巻は吉野川を隔ててそびえる白鷺岳のピラミッド的な地姿である。

登山道は往路を中央に引き返すこと。なお百合ヶ岳車上より南西に稜線を縦走してカラ谷におりられるが、熟練者以外は避けるべきである。踏み跡は頂上より今宿跡への稜線分岐付近まで、このあたりは広い尾根状となりガスのかかった時は迷いやすい。分岐を過ぎて少くなくと蛇腹とよばれる急峻なやせ尾根の岩稜となる。さらにくだると、危険な岩壁が二か所あり、そこからカラ谷側にくだればよいが、急峻な岩壁で間伐材の放置された荒れた杉林の中を、スリッパを脱ぎながらおろすのはめんどろ。

国民宿舎
大佐渡ロッジ
1泊2食付き 7200円
〒952 新潟県南津市橋
U2592-7-4570

実した山行が味あえるだろう。村道終点より山道を往復1時間30分かかるが、巨岩の上から二条となって50mの高さから落下する崖々たる滝は一見の価値がある。
(平成8年11月3日歩く)

▲コースタイム▼
下多古十郎バス停(1時間10分) 村道終点(1時間) 水場(1時間) 稜線クレーン跡(40分) 百合ヶ岳(2時間) 村道終点(50分) 下多古十郎バス停(道標なし)

▲地形図▼2万5千1:10000 洞川

クレーン跡より百合ヶ岳を望む



特選コースガイド

紀泉

山桜を愛でつつ歩く

ボンデン山から根来寺へ

初級コース(★)
要佐次 盛一

春の陽気に誘われて、ちょっと花見山行へと思っても、4月ともなれば桜の名所はどこも人が多く、ゆっくり桜を愛でることもできない。静かな所を歩けば遠くなるし、比較的手近な所で、しかも静かで山桜を心ゆくまで楽しめ、花見山行の穴場ともいえる泉南のボンデン山から和歌山の根来寺へと歩くコースをご紹介します。

コースのほとんどは舗装車道だが、通過する車は少ない。コース途中に三角点が二つあり、興味のある人は訪れるとよい。興味があればそのまま広い車道を進めばよく、家族連れで一日楽しめるコースである。年によって桜の開花時期が異なるだろうが、4月1日から10日ごろがベストと思われる。



を越しているが、旧土佐峠を訪ねるのも一興だ。ただ入り口が分かりにくいし、一部やぶこぎになるから自信のない人は車道の峠を越えたほうが無難である。

峠付近の左側に気をつけていると、サナの中にかすかな踏み跡がある。峠の入り口である。矢竹のやぶの中を進むと、いつしか踏み跡も途絶え、やがて山の両側が崩れた旧土佐峠に着く。とても峠とは思えない所だ。峠の上にも三角点があるからついでに訪ねてみよう。

峠の左斜面を登ると踏み跡が現れ、簡単に3等三角点に着く。切り開きがあり、山桜も咲く。たまには訪れる人がいるらしく朽ちた標識が残り、北東に和泉山脈、西側に根来方面の町並みが見える。

崩れた峠までくだらずとも、三角点から

南海和歌山線開井駅で下車。駅前から近畿大行ききの南海バスに乗る。バスは梅林で有名な金鷹寺や草子畑を経て、葛畑のバス停につく。左側に葛畑の村へ上がって行くセメント舗装の道があり、つま先驚りで進む。猪もいるらしく猪を飼う小島が足下に見える。

バス停から1000ほど高さの山腹に葛畑の村落がある。質素で清潔な村だ。道は狭く、向かい合う軒が接するほどである。村落を抜けると左側にセメント舗装の細い道が山に向かっておりこれをとる。すぐにミカン畑になり山菜採みを楽しむ人を見かける。

稜線上に出ると道は広くなり、ほぼ平坦な道が続く。途中に供花のある墓が一基ひっそりと行んでいる。むかし泉州と紀州の土地争いで犠牲になった人の墓だという。左から地形図上の破線の道、右から葛畑からの道が合流する。道はゆるい傾斜でボンデン山へ登って行く。道が良ければ、可愛らしいテンの姿も見られるだろう。

先の方に、大きなアンテナが見えてくれればボンデン山に近い。アンテナが近づくと山桜も見られ、はるか泉南沖にかすむ関西国際空港も望める。ボンデン山の三角点はが視野いっぱい広がる。

下のほうから賑やかな声が聞こえてくる。緑化センターで、やがて音場峠。ここは根来断崖が露出する学術的にも貴重な所である。もう根来寺は近い。しかし、桜の名所とあっては音場からはまぬがれようもないが、バス待ちの間境内の多宝塔や根来寺庭園を巡れば有意義であろう。

- ▲コースタイム▼
- 南海開井駅(バス25分) 葛畑(1時間) ボンデン山(30分) 馬別れ(25分) 土佐峠(三角点)(1時間) 音場峠(10分) 根来寺(バス35分) 開井駅
- ▲地形図▼2万5千11岩出
- ▲問い合わせ▼
- 南海バス 0724(62) 0227



アンテナから南の林道の、左側の高みにある。三角点はわずかな距離で和歌山県になり、標高は低い。ボンデン山とは麓で、水に由来する山名だと考えている。


元の林道に戻り、ゆるやかに南へくだる。両側の山腹には山桜が多く、開花時期に合えばさぞかし壮観であろう。通る車もまれで、ここはゆっくりと山桜を愛でつつ歩いてほしい。ウグイスの鳴き声も聞こえるだろう。植樹されたソメイヨシノの華やかな美しさに比べると、山桜は地味な存在だが、自然林の萌芽に包まれて咲く山桜は実に味わい深いものがある。

くだりきつた所に「馬別れ」の札があり、今期への道を左に分けるが、そのまま土佐峠へゆるい坂道を上がる。今では車道が時

南へ旧峠道がたどれる。いい雰囲気を残す道だが借しにことにすぐ元の車道に出てしまふ。車道をくぐっていると、眼下に悠々と流れる紀ノ川や対岸の飯盛山から麓門岳への山並み、その奥には長峰山脈や白馬山脈が重なり合、た美しい風景



営業時間 12:00-20:00 TEL 06-319-0597
吹田市内本町1-25-7(3月より定休日なしで営業します)



CAMP-HIKE-CLIMB
TOMY WALK

特選コースガイド④

奈良中部

宇陀富士と呼ばれる秀峰

鳥ノ崎屋山

初級コース(★)
柴田 昭彦

竜門岳から東にのびる尾根に続き、秀麗な円錐形の頂きを見せるのが俗に宇陀富士と呼ばれる鳥ノ崎屋山である。江戸時代の『大和志』や『大和名所図会』には「鳥ノ崎屋山」と記されている。トナとは「鳥のすみか」を意味し、昔たぐさんの鳥がねぐらをかまえていたことから生じた山名と考えられている。今日では凶兆を伝える鳥とされる鳥だが、八咫鳥の伝承に見られるように古くは神意を告げる霊鳥とされ、この山も神聖視されてきた。

山名はよく目にする鳥ノ崎屋山であるが、コースガイドとなると、中西政一郎氏による「鳥ノ崎屋山から竜門ガ岳」の記事が『続・近畿の山(山と溪谷社 昭和34年)』の

中にあるだけで、最近のものは見当たらない。今回、静寂に包まれた元岡野大蔵寺から山頂に登り、麻村谷を経て最近オープンした「吉野野見三茶屋」に至るコースを紹介することしよう。

近鉄線駅前のバス乗車券つりばで大蔵寺前までの切符を買い、8番のりばで9時48分発の宇陀赤町経由宇陀行きのバスに乗る。大蔵寺での乗り換えなしで、10時11分発の山原結環バスに切り変わり、同19分に入蔵寺前バス停で降りる。

横断歩道を渡るとかたわらに祠と石標が目につく。次の分岐点の右側には「右おくら寺表参道」と刻んだ石標がある。坂を上がり車道を右に見送って進むと、弘法大師の加持水と伝える目洗井戸がある。このあたりで左手に美しい円錐形の山容が見え隠れする。

迎え地蔵まで来ると、ほどなく雲智山(王院大蔵寺の境内に入る。寺伝によれば聖徳太子の關所と伝えられ、後行者も修行をしたというが、後に弘法大師が高野山を開く前にここに真言宗の道場を設けたことにより、「元岡野」とも呼ばれている。山の中の仙境の趣があり、鎌倉中期建立の本堂や御影堂(大願堂)は補正の屋根の反りが

35) 路の南朝高貴の墓(古墳)に出る。宿坊跡を巡りながら観音堂をたどるのもよい。春にはツツジが美しい。本堂の横の脇之坊跡の左のほうには、イレもある。

御影堂の左手の案内板に従って小径から「手水使の谷」への道をたどる。松笠坊跡の右側から広い道が上がってもよい。尾根道を進んでいくと「松茸山崩中入山禁止、

11月30日迄」という立て札が目につく。秋の期間中は入山を遠慮しよう。寺から10分ほどで水増が設置してあるところに出る。東から南へかけての展望が開け、円錐形の高見山から南へ連なる高島山脈の山々、白屋岳など大崎山脈の前衛峰、そして南側に鳥ノ崎屋山の山体が並び、実にすばらしい景色である。この先、山頂を越えて鉄塔に



大蔵寺(御影堂と石塔)



美しく、因指指定重要文化財となっている。本堂に本尊菩薩師如来立像、御影堂には弘法大師坐像が安置されている。横に延心二年(744)銘の十三重石塔(現在は十層のみがある。中世には十八ヶ院の末寺を持ち、山内に六坊を有する本山格的な存在であったという。旧木坊文殊院の横には圓倉大心が寄贈したという茶室風の弁事堂があり、子授け地蔵として信仰を集めている。その奥へ小径をたどれば、正平六年(1

出るまではほとんど展望がないので、11時過ぎぐらいで、ちょっと早いかもしれないが、この展望地で昼食にすることをおすすめしておこう。

水増の右手から山道へ入る。ほどなく保安林の標識の立つ分岐に着く。右を走れば弘法大師が手水を使われたという「手水使の井戸」がある。右へ少しおりて左へ進むと「雲智の祠」がまつてある奥の院にたどり着く。保安林標識の分岐まで戻り、左の道をたどる。右手に尾根、左手に谷を見ながら行くと岡山軍力の「奥吉野線ハハ」と記したプレートのある分岐に出る。右の道をとる。すぐ右に木柱が立っている。草の茂る道となり左側に溝道が現れるが、まもなく合流し「造林地につき立入禁止」の立札が現れる。

左側の木にピンクのテープが巻いてある所から少して、左側に黄テープの目印がある。ここが分岐点だが見落さずじやなく、そのまま進むと左側にトタン小屋が現れる。さらに奥へ進んでも尾根道に出られるが、道回りにならうと、急坂にあぐらことになるので50付近で引き返して目印を見つけたほうが明瞭だ。分岐で左をとればまもなく境界線上の尾根道に出会う。あとは左へ尾



目洗井戸付近から見える円雄の頂

根道を忠実にたどる。アツブゲウンを振り返し、右手に竈門岳が展望できる開光の差す場所から、富士山タイプの山につきまもの胸突き八丁の急坂を登りまれば、ちょっととした広場となった烏ノ崎屋山山頂にたどり着く。

昭和40年代まで開けていた展望も今では植林によって失われ、むしろ荘厳な雰囲気があったよう。3等三角点と石組みの上に梵字を刻んだ碑がある。地元の小学校の高等

生児童によるプレートはせっかくだが見苦しい。栗野の集落の人々はここで火を焚いて祈り、雨乞いを行っていたという。また古来の話によると、頂上に浅間さんと呼ぶ苦の生えた碑があり、富士山と遊んであって江戸時代に盛行した富士山信仰を物語っていたという(吉野史)。今日、この碑はどこにも見当たらないが、どこに消えたのだろうか？

さて、下山は直進して南へくだることにしよう。すぐに分岐がある。左側の青テープが示す黒いケール線に沿った踏み跡に入りやすいが、倒木が多いので避けて右側の尾根道をつくると、まもなく鉄塔85に出る。ここからは烏ノ崎屋の展望がすばらしい。火の用心84の標識に従って、すぐ左に折れて尾根道を行って行く。松の木をそばを通り過ぎると歩きやすくなり、途中で尾根道を離れて左手ヘジクザグにくぐれば谷間で、草におおわれたケール線に沿う踏み跡からの道と合流している。流れに沿う岩肌を少しくだると正面は谷で、左へ進む。ほどなく鉄塔84に出る。

鉄塔の所でこのコース最後の展望を楽しむんだあと、尾根を貫く溝状の道をつく。途中荒れた根道を避けて右側の縁を通り、

再び根道をつくれば水城で竹林に突き当たりそうになる。その直前で右へくだり、丸太を渡れば恋の谷の隣屋の前に出る。屋根が閉ればじめていて哀愁がたよっている。恋の谷は三基屋の小さな集落でかつて四軒あったというが、一軒は転出、もう一軒は谷の出口に移ったため、昭和30年代には二軒を残すのみとなっていた。今から十数年前に二軒とも住民が去り全くの廃村となってしまったという。

隣屋を後にして、次の分岐で左へ入ってみると池のそばに祠があり、農機具を置いた倉庫もある。こちらの家屋は火事で焼けてしまったと聞く。このあたりは山仕事の人がよく手入れをしているようで、杉の木に巻かれたまっ白なプラスチック片が独特の景観を生み出している。床柱用材に人工的にしわを作るためのもので、「しぼり」と呼ばれている。

もとの分岐に戻り少しくたると、右手に長尾谷へ入る道がありそばに小屋が立っている。左側にはかつて水田だった跡が窺える植林地がある。次の分岐で左へたどれば国綱峯谷で、恋峠(仲西氏は「越峠」の標記だろ)というが、「肥峠」と思われるを経て、牧の集落に出ることができ、分岐

には古い石段の上に新しい祠が二つ並んでいる。右へ進む落ち葉のかぶさるコンクリート道を辿るとくれば、三基屋の集落に出て、狭い旧街道に出会う。

宇陀吉野街道は、三基屋の乱において吉野宮を脱出した大海入皇子(天武天皇)が、宇陀を経て伊賀に向かう時にたどったルートと推定されている(新訂大分県史)。

一方、上市と熊家を結ぶ伊勢向街道は、因幡経路もあるが、三基屋を通る前門街道



穴字碑が建つ初雪の山頂

も伊勢向街道として利用され、紀州徳川侯が参勤交代で往来した紀州街道でもある。三基屋にある「石いせ道」の石標の立つT字路は、これら二つの街道の交差するかつての交通の要衝であり、たばこ屋のねんのかかる中倉呉服店(地名の由来となった二つの茶屋のうちの一つ)、「ウエンチャヤ」(二の茶屋)であったという。残り二つは、「中や」と「中の茶屋」だが、家屋は残っていないようだ。

車の往來の多い新道を横切り、いせ道を東へたどると杉の大木のある久須野神社に突き当たる。笛吹と大井の二神を併せて俗に三社大明神と称しているそうだ。文政年間(1818-1828)の金比羅大権現と大権現おかげ参りの灯籠がある。

信号交差点の両側に三基屋バス停があり、その前に平成8年4月にオープンしたばかりの「吉野見附三基屋」があり、マイカーで訪れる観光客に好評のようだ。市の茶屋(三基屋の物産館・恋の茶屋(レストラン)・山の茶屋(日本で唯一の家と木の資料館)は、ネーミングもおもしろい。きれいなトイレも完備している。パヌの時刻まで退屈しないで過ごせることだろう。毎週火曜が定休日となっていて、資料館入館料は大人300

円、午後5時までである。

三基屋バス停からは15時01分・14時31分・16時01分・17時01分・18時32分(近鉄大和上市駅前行き)のバス便があり、コースタイムからいけば14時31分(バス)に乗ることができよう。

なお三基屋バス停から13時01分と18時01分(大分県庁行き)のバス便も利用できる。大分県で検定旅行に乗り継ぐとよい。(平成8年12月1日歩く)

△コースタイム▽

大蔵寺前バス停(25分) 大蔵寺(10分) 大蔵寺水梯(35分) 地界尾根分岐(30分) 烏ノ崎屋山(10分) 鉄塔85(20分) 鉄塔84(10分) 恋の谷集落(35分) 三基屋バス停

△地形図▽2万5千1古市編



連載

雪山山

山形歳之

台湾五岳三尖も五山日になった。今回は、ある山岳会の人たちが玉山と雪山に登るの、後半の雪山だけに参加させてもらうことにした。一人での登山は車代やガイドの負担が大きくなる。

毎度の台湾行きで、海外へという感じもなく気候な気分がザックを前に一人台北空港に降りる。バスを乗り継いで東台岳所の台中のホテルに向かう。

台中は前回の南湖大山の登山の時も宿泊した所で、今後中央尖山に登る時にもここからの出発となる。

今回の雪山登山は、
1日目 日本→台北空港→台中市泊
2日目 台中市→武陵農場→七卡山荘泊
3日目 七卡山荘→二六九山荘→雪山→七卡山荘泊
4日目 七卡山荘→宜蘭→台北市泊

1日目 日本→台北空港→台中市泊
2日目 台中市→武陵農場→七卡山荘泊
3日目 七卡山荘→二六九山荘→雪山→七卡山荘泊
4日目 七卡山荘→宜蘭→台北市泊

5日目 台北空港→桃園
以上5日間の予定である。

前同様食料はガイドが持参するが、今回はシュラフも準備しておくこと、日本からの個人装備は、防寒着・雨具・食器・カメラ・寝具などを中型ザックに詰めて行く。

七卡山荘にはスポンジのクッションもあるといふので、マットも持参しなかった。荷物が少なくて助かる。

ガイド・ポーター三人と共に総勢十四人が二台のバンに分乗して台中市を出発する。途中市場に立ち寄り、肉や野菜、缶ビール等の食料を買い込み、一路梨山に向かつて国道8号線(西横貫公路)に入る。

前にも通ったこの台湾中央山脈を横断する国道は断崖絶壁の連続で、ハンドルを持っていくだけでも緊張する。

台湾では高山(現地人の居住地)に入るには台湾人でも許可が必要で、登山口には警官の派出所がある。ここで入山届けを見せ許可印を買ったことになっていたが、警官は不在であった。

よく踏まれた登山道を現地の人たちといっしょに登って行く。40分程で感合合に着く。ふり返ると、なつかしい南岸大山がくっきりと浮かび上がっていた。去年登ったコースを日を追ってみる。多加中山・番馬陣山、そして北峰から南湖大山。ほろかに長い連続である。さらに左に大きな三角の頭を持ち上げる中央尖山がすばらしい。いつか行かねばならないこの山の雄姿に身震いした。

道は尾根を回り鞍部に登る。玉山の連雲山荘にも劣らない大きな七卡山荘が姿を現した。
長さは50軒もあるだろうか、幅が8mほどの長屋で、中央が玄関で左右に大部屋が並び、その中を広いコンクリートの通路が走る。二階の床が敷かれた天井も高く明るい。二階に炊事場と男女別のトイレがある。トイレは水使で気持ちよい。管理人の姿は見えないが、きれいに掃除されていた。むしろ排雪山荘より気分のよ

雪山山頂



梨山(武陵農場)でひと休み、目の前に広がる雪山連綿を眺める。さすがが富士山を凌ぐ高峯の威容にあすの登山が思いやられた。

登山口の武陵農場に向かう。ここは公立の公園になっているため入場料が必要で、場内には立派な宿舍や食堂・売店・管理事務所、その他キャンプ場などの設備がある。

管理事務所の売店には、雪山の簡単な記念品を売っている。その他に食料品のコー

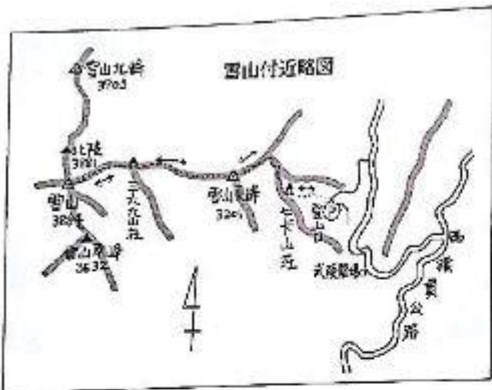
い小屋である。

夕食はカレーライスが作られる。ガイドたちは20kgものLPガスボンベをこの小屋に持ち込んでいて、来るたびに使用しているらしい。各自持参のアルコールを出して楽しいひとときを過ごす。夜半には日本の都会では見られなくなった満天の星が輝いていた。19時半にはシュラフにもぐり込む。

翌午前2時半、パーナリーの音に目が覚める。味噌汁で朝食をとって外に出るところと半月が輝いていた。暖かい。湿度計は16度を示している。さすが台湾は南国だ。

ライトを点けて台湾の青年の後に続く。尾根の登りは林や草原で、木のない所は月明かりで十分に歩ける。道は明瞭で所どころの道標には雪山10・8kmの文字が見える。やがて急坂を登りきると稜線の上に出た。

幾つかの小さい登りおりを繰り返して、雪山東峰に登り着く。木のない山頂はすばらしい展望で、ちょうど日の出が始まった。南湖大山の二階から一筋の閃光が走ると、たちまち真っ赤な火の塊が目に飛び込んでくる。日の出は数秒間である。前山の間か



ナーもある。雪山の登山口までは、さらに農道が5-6kmのびていて、小型車なら通行ができる。道はほとんどと高度を上げ、一軒の農家の前で終点となる。駐車場はないので道端に車を寄せて始める。
七卡山荘までは徒歩1時間程なので、午後の遅い時刻に登山者が集まってくる。あすも好天気とのことで、傘や防寒具は車に預け、貸与されたシュラフと缶ビールをザックに詰める。



雪山東峰より朝焼けの雪山

ら頭を見せていた雪山本峰はみるみる太陽の光を受けて輝き始める。見ている間にも光はどんどんと中腹の樹林帯に降りてきて眠っていた三六九山荘が白く光りだす。太陽は数分で山を照らし出した。

あちこちからカメラシャッターの音が響く。東峰には二等三角点が設置されていた。

まだほのか先の三六九山荘まで歩いて後継をたどる。少しくだりきみに小一時間か

かって小屋に到着する。ここは小屋も七ヶ山荘と同じ形でかなり大きくきれいだ。水がなくトイレは簡便で使用不能だった。しかし広い山の斜面の展望の良い所にある。

八瓶の後、急斜面の草原をジグザグに登り林の中に入る。樹林帯は分らないが北八ヶ岳の樹林の中を歩く感じである。所どころに清水がしみ出ているが、水を得る程の量はなかった。樹林を抜けて大きなカール状のガレ場に出る。

谷の彼方から「ほーう、ほーう、」と声が響く。「誰だ」と同行の青年が見つめるも姿は求められなかった。

いよいよ最後の登りである。心臓の鼓動が激しい。50歩ぐらい歩いては立ち止まり大きく深呼吸を繰り返す。今までの登山では感じなかった心臓のこの高鳴りは高度のせい、または体力の低下だろうか、目の前に見える山頂がすいぶん遠かった。

たどり着いた雪山(3884m)の山頂は百坪ほどの広さで、その一角に山名板が立っていた。しかしお目当ての三角点が見当たらない。散乱する岩の中を探すと花崗岩の塊が見えた。測ってみるとさうちり20坪四方あり、一等の標石であること

が分かる。それにしても何という破壊のひどさだ。日本でも角の欠けた標石を見るが、このように三ヶ岳の標石と判断できないくらいまで壊されたものは見たことがない。ガイドの話では、台湾ではこのようなイタズラが多く、先般も玉山山頂の銅像が壊されたと憤慨していた。それにしてもここまで随分には重たい用具が必要だが、こんな高山に相き上存まで破壊するとは理解に苦しむ。何か政治的意図でもあるのだろうか。三角点にこだわりを持っている私は、大変腹立たしい思いをした。

山頂からの展望は何一つ遮るものがない。すぐ目の前に雪山北峰が立ち上がっている。標高はこより8分ほど低いのだが、高く見える。雪山からいったん大きくくだり、はい上がる一筋の縦走路が細くくのびている。さらにその先は激しいピークを幾つも繰り返しながら、ほのか彼方の大駒天山へと続いている。

写真でしか見たことがなかった大駒天山の特異な姿に感動を覚えた。ここからも縦走が可能だが、水もない縦歩きは相当の装備と体力が必要で私には不可能である。縦線の一角には桃の形に見える桃山も望まれる。もちろん南には南湖大山の連峰、

遠く玉山もシルエットを見せていた。

山頂での一時間はすぐに過ぎ、下山にかかる。登りよりは突だといっても先は長い。

三六九山荘ではすでに20人ばかりが泊まる準備をしていた。あすから土・日の連休に入るので登山者は昨日より多くなりそう

だ。

雪山東峰で山頂に最後の別れを告げると



七ヶ山荘

ので道の様子がよく分からなかったが、これほど多くの登りぐだりがあったとは。気が急いでいたのか、疲れていたのか、それにしては長く感じた後継であった。

長い後継から開放されてやっと道はくだりにかかると、ほのか彼方に武蔵峠が見える。まだ先は長そうだが、やがて前方の木陰に人影が見えた。小屋に残っていたガイドがお茶を用意して待っていた。ポットの生湯が暖かみする。いよいよ小屋に近い。温かいお茶で元気を取り戻し、一気に小屋まで駆けくった。小屋にはすでに十数人の人々が登り着いていた。

きょうもこの七ヶ山荘に泊まる予定だったが、温泉に入って汗を流したいとの意見がまとまり、急遽下山することになる。用意されていた夕食を急いでとると、日の落ちないうちに荷物をもとめて下山する。登山口の車までは5分くらいである。だが、今日がくたり終った時には、すでに暗くなり暗くなった。

夜の横貫公路に車を走らせる。相変わらず山がくりくわった道だが、車の数が少なからずかなりのスピードを出していた。夜道を。時間余り走って、前回は泊まった武蔵峠温泉

のホテルに到着する。遅くなったが汗を流してベッドで寝られるというところは、言うまでもないことだが山小屋よりずっと快適だ。

翌朝は雨になった。小屋に泊まっていたる下山は雨の中である。きのう下山してよかったと全員が幸運を喜ぶ。きょうは台北に戻り半日市内観光。台北は何回も観光しているが、初めての人もいるのでお付き合いもしたがない。今夜は台北泊まり。翌日空港で隊の人たちと別れて帰国した。

(平成8年11月歩く)

△コースタイム▽

- (1日目) 関西空港(約2時間30分) 台北空港(バス2時間40分) 台中市
- (2日目) 台中市(車約5時間) 武蔵峠温泉登山口(1時間) 七ヶ山荘
- (3日目) 七ヶ山荘(2時間30分) 雪山東峰(50分) 三六九山荘(3時間) 雪山(1時間50分) 三六九山荘(45分) 雪山東峰(1時間50分) 七ヶ山荘(45分) 武蔵峠温泉登山口(車約30分) 関西空港

無難な行程が生命にかかわることを忘れてしまつてからである。
足を前へつて歩きながら北アルプスの山の中から1-9番するノーマンキ人がいる。
こんな風情にさして関西が声を大にして全以上に騒ぎまくってくださることを期待します。
(安藤 正義)

十七日山行日程
一日「やま」と地形図の会社 例会
車庫(谷)「山行」へ。西麻野街道を大目川へ。参加28名。
8日 山行(「山行」)へ。参加28名。
9日「大和登山会」例会。旧海軍柳本飛行場へ。参加28名。
15日「点のつら」例会。松崎寺址「木下」古墳。山色大根川。「(「敬称)」。女朝「飛鳥川」上野子多岐北道神社。男朝「右」集合で解散。参加28名。
16日 伏見公民館主催「大和水上中社の夢路」。天谷組とニホンオオカミの終局の地を訪ね。麓家で大和から最速をみす道しるへを戻る。参加36名。(上田 徳昭)

「お福さん」は元来五穀を司る農業の神であるが、現在では商業の神の要素が強いようである。ここ伏見稲荷大社の初詣参拝者は全国第五位だとか。
海抜233.7mの稲荷山は本殿の横から登り、稲荷大社の裏山にある。境内の案内板に「一の峰(頂上)まで1.5km、30分、山めぐり4.5km時間がある。大木はもみかすに倒れるが、普通の山と異なるのは全山赤松で囲まれた道を登ることだ。
特別の祈願に奉納されるという大小の赤松が頂上までほとんど切れ間なく建々と続く。何千本、いやそれもあるかも知れない。つまり、その鳥居の下を歩くと、石段と石段ばかりで、山歩きとしてはおもしろくも何ともない山だが、赤松の道というユニークさは一度登ってみたい。
赤松道は道幅15cm程度のものから、直径40cmもありそうなおもしろい山歩きだ。両側の景色も見えないくらいびっしりと続く。その一本一本に奉納者の名が刻まれている。会が企業名を刻んでもいい。よく知られた大企業も多くある。

「稲荷科子……」という名もある。お福さんとは稲荷科子、どう結びつくのだろうか。古くは水が降り、ボロボロになった鳥居もある。そんな社はどうなっているんだらう。いろいろ考えながら歩くのも一興である。
途中に何軒かある米屋の自動販売機はすべて160円、ケースに入れて160円で売っていた茶店もある。いくら稲荷の神から前元の神に参拝したとはいっても、アルプスの山ではあるまい。石段の下までは軽トラが入っていたのはえげつない。40円も損だと腹を立てながら、お茶を一本買ってほかにした。
おもしろい中、稲荷科子生らしき男女の団体が赤松道を一本一本敷えながら、キックキックと登って行くのに出会った。
稲荷山には幾つかのコースがあり、もろこの名所「奥稲荷」へもおりられるようだ。
(小西 半兵衛)



山行計画 (3・4月)

このページの山行計画には、「会員に限る」とお断りしてあるほかは会員外の方でも参加できます。一人ずつ往復ハガキに記入し、例年より必ず出発の7日前までに到着するように申込み先に申し込んでください。電話・FAXでの申し込みはお断りします。「費用」のほかに参加費(例年)その他の資料費実費を頂くことがあります。
山行申し込み後参加できなくなった場合は必ず係に連絡してください。休日の悪い日、知見と申し込みはお断りします。
例年の参加者全員に傷害保険がかかります。出発直前の際、係に保険料1000円と救護対策費1000円(合計2000円)を銀行振込みの振り込みにより(2000円)を支出して頂きます。
傷害保険料は次の通りです。(例年)救護対策費(会社と契約)

入院保険金	1000万円
通院保険金	5000円
通院保険金	25000円

保険の対象は集合時から解散時まで、事故があった場合は解散まで係に申し出て下さい。この保険に該当しないものは次の通りです。①ビジュアル・6本以上のアイゼン・ザイル・ハンマー・ワカンを持参することを明記した山行。②スキー使用の山行。③沢・岩・氷を登はんを目的とした山行。④前頁所内の事故(詳細は係まで)

(記入例)
(往復ハガキを使用)

山行申込み書

山行名
期日
住所 〒
電話番号
氏名
会員番号
(会員でない方は会員外と記入)
生年月日
緊急時の連絡先

往復ハガキの宛名欄にご自分の住所氏名と「様」を記入して下さい。

地図読み山行

地図読み山行は、(初級向き)
期日 3月2日(日) 日帰り
集合 近鉄郡山駅西口バス(約3時間分)
コース 郡山駅(バス)・兼光院・松原寺・回見台・矢田寺・東明寺・寺の森・近鉄郡山駅(バス)
費用 約1500円(大阪から)
地図 2万5千・牛輪山・信貴山
係 ①松元一彦 ○中村 登
申込み 5/36大阪市場東区南目4の14の9C
要元まで
要元まで
要元まで
地図読み山行は、(初級向き)
期日 3月4日(日) 日帰り
平日ふれあいハイカー
月夜・牛輪山 (初級向き)
期日 3月4日(日) 日帰り

日本唯一の女人禁制の山「大雪山(合掌山)の登山口」(稲荷科子)も有名。コースもあり温泉・名水の山
旅館 木の国屋 茶八
1泊2食付 7,000円から
T0941-1111
奈良県宇治郡天川村稲荷科子
電話 0747614161-30309

九州の最南端・日本語者山宮之御前(一番坊)宿
屋久島グリーンホテル
T841-1111
鹿児島県鹿屋市屋久町安房
電話 0997416130301

ハイキング・キャンプに
鈴鹿県志保町
朝明谷 あさけ茶屋
T510-1111
三重県三町郡志保町朝明谷
電話 0593193117660

○「せせらぎ」欄は自由投稿です。最新の情報をお寄せください。山行の思い出や感想など、一行15字以内・2行程度にお書きください。
新ハイキング関西編集室

山行例会の実施について

山行例会に保険を付けたら、登山届けを提出しますので、実施日の7日前までに上記記入例の通り、必ず往復ハガキで申し込んでください。人数により前もって、バスなどをチャーターする必要もあります。また山ではいかなる事態が発生するかも、緊急連絡先など、記載すべき事項はもれなくご記入ください。
申し込みの返信案内は細目が決まり次第、山行日の10日前頃にします。早くから申し込みました方はそれまでお待ちください。定員のある計画は先着順に受け付けます。
記載のグレードは、當日登山歩みに合わせておられることを前提としています。
(初心者)やさしいコース
(初級)やや難しいコース
(一般)ハイキングの標準コース
(中級)かなり難関のコース
(やや難関) (難関)は、危険を伴い、キツイ登りや、くんだり長く続くコースと、ご理解ください。

集合 J R武蔵野線西国町駅 8時

コース 鳥飼駅・牛松山一岡分
鳥飼駅(新設バス分道)
費用 約800円(京都市から)
地図 昭文社「40京都市山」
係 ①川上久隆
申込み 〒610-0101 城陽市寺
田大群10の10 新ハイキ
ング園西まで
今年のエトの山に登り、「平日
ふれあいハイエ」シリーズのステ
ートにします。表参道から登ります。
小雨決行

大峰・河川から大天井

期日 3月9日(日) 日知り
集合 近鉄下市口駅9時10分
コース 下市口駅(タクシー) 河
川一五間開一六天井一鞍
部一河川スキー場一河川
(バス)下市口駅(解散)
費用 約500円(タクシー・
バス代)
地図 2万5千円河川
係 ①澤本勇作
申込み 〒545 大阪市阿倍野区
西田辺町1の1の1
福本まで

定員20名(会費に限る)

山頂までの登山道は整備されて
いるが、西へ向かう下山道はヤセ
笹の急降下でやぶこぎが続く。
服装は必ずします。雨天中止
ハイキング入門1
栗山城・大峰(方竹呂山)
(初心者向き)
期日 3月9日(日) 日知り
集合 J R奈良線山崎多田駅前
10時
コース 山崎多田駅一栗林道分
岐一登山口一六峰一聖土
の滝一南谷道一栗谷
林道一山崎多田駅(解散
15時頃)
* 歩行時間:約8時
費用 約1500円(京都から)
地図 2万5千円河川
係 ①村田智俊 ②宮比呂夫
申込み 〒610-0101 城陽市寺
田大群10の10 村田まで
初心者の人に山歩きのアドバイ
スをしながらかゆく歩きます。
山頂の大広場から眼下に山城・京
都市街が一望できます。小雨決行
山階自然歩道
雲霧山から養相山(一般向き)

山階自然歩道

期日 3月9日(日) 日知り
集合 J R武蔵野線西国町駅 8時
コース 西国町駅(バス) 西国
町駅(バス) 西国町駅(バス)
費用 約1000円(バス代)
地図 昭文社「40京都市山」
係 ①川上久隆
申込み 〒610-0101 城陽市寺
田大群10の10 新ハイキ
ング園西まで

期日 3月9日(日) 日知り

集合 J R武蔵野線西国町駅 8時
コース 西国町駅(バス) 西国
町駅(バス) 西国町駅(バス)
費用 約1000円(バス代)
地図 昭文社「40京都市山」
係 ①川上久隆
申込み 〒610-0101 城陽市寺
田大群10の10 新ハイキ
ング園西まで

須磨園まで

期日 3月9日(日) 日知り
集合 三岐鉄道西野尻駅8時
コース 西野尻駅(車) 坂本谷一
白根一京ノ谷一龍院の
窟一天狗岩一お徳の風船
滑降一坂本谷(解散16時
頃)
* 歩行時間:約8時
費用 約1500円(京都から)
地図 2万5千円河川
係 ①村田智俊 ②宮比呂夫
申込み 〒610-0101 城陽市寺
田大群10の10 村田まで
初心者の人に山歩きのアドバイ
スをしながらかゆく歩きます。
山頂の大広場から眼下に山城・京
都市街が一望できます。小雨決行
山階自然歩道
雲霧山から養相山(一般向き)

費用 交通費各口

期日 3月13日(木) 日知り
集合 大原寺バス停8時50分
コース 大原寺一長谷一栗谷一栗
谷山一栗谷峠一河川
金栗山一栗谷峠一河川
院一草生公園(解散・大
原から北大路・京阪出町
御着駅(バスあり)
費用 交通費各口
地図 昭文社「40京都市山」
係 ①澤本勇作
申込み 〒610-0101 城陽市寺
田大群10の10 新ハイキ
ング園西まで

平日本曜ハイイク20

期日 3月20日(日) 日知り
集合 J R東山線山崎多田駅前
8時50分
コース J R東山線(車) 中津線
合庁舎(車) 山崎多田駅前
平一栗谷峠(解散)
費用 ガソリン代等諸別り(交
通費各口)
地図 5万1千円
申込み 〒504 岐阜県岐阜市
藤原町1の19の5
見覚まで
* 登山道は、登山者の手で整備
されています。登山者同士は、
お互いに気遣いをお願いします。
登山マナーの方は中津線合庁舎
への集合も可。雨天決行

ング園西まで

春の息吹を感じながら、銀草
崩山から大原の里山をゆっくり歩
きます。雨天中止

北神戸・シビレ山と丹生山

期日 3月16日(日) 日知り
集合 神戸電鉄新開地駅改札内
8時20分
コース 新開地駅(電車) 道場南
口駅(バス) 不備口一
ヒレ山一丹生山一丹生神
社前(バス) 養父駅(電
車) 新開地駅(解散)
費用 約2000円(神戸から)
地図 2万5千円河川
係 ①井上保
申込み 〒674 明石市大久保町
井上まで
六甲山系の北に位置する丹生山
系は、六甲山系にはハイカーに合
わず、静かな山歩きが楽しめます。
小雨決行

鈴鹿を歩く24

期日 3月16日(日) 日知り
集合 大原寺バス停8時50分

8時30分

コース かもしか社(車) 477
号線大崎宮谷入口一南尾
根一7966号一南尾之
岳一雨乞岳一西尾を登り
清水ノ頭一清水ノ谷林
道一雨乞岳一大崎宮谷一
477号線(解散)
費用 交通費各口
地図 昭文社「45御在所・鎌
倉」
申込み 昭文社 明 〇山本久延
〒610-0101 城陽市寺
田大群10の10 新ハイキ
ング園西まで
* 登山道は、登山者の手で整備
されています。登山者同士は、
お互いに気遣いをお願いします。
登山マナーの方は中津線合庁舎
への集合も可。雨天決行

ハイキング入門2

期日 3月16日(日) 日知り
集合 大原寺バス停8時50分
コース 大原寺(バス) 大原寺
新開地(バス) 新開地(バス)
費用 約1500円(京都から)
地図 昭文社「40京都市山」
係 ①川上久隆
申込み 〒610-0101 城陽市寺
田大群10の10 新ハイキ
ング園西まで

1 真而滝一阪笠寺西照

期日 3月20日(日) 日知り
集合 京都地下鉄北大路駅改札
8時45分
コース 北大路駅(バス) 出雲橋一
種ノ水谷山一山崎多田一
夜泊峠一向山一山崎多田一
西野尻(解散)
費用 約1500円(バス代)
地図 昭文社「40京都市山」
係 ①西野尻
申込み 〒610-0101 城陽市寺
田大群10の10 新ハイキ
ング園西まで

京都北山歩き50

期日 3月20日(日) 日知り
集合 京都地下鉄北大路駅改札
8時45分
コース 北大路駅(バス) 出雲橋一
種ノ水谷山一山崎多田一
夜泊峠一向山一山崎多田一
西野尻(解散)
費用 約1500円(バス代)
地図 昭文社「40京都市山」
係 ①西野尻
申込み 〒610-0101 城陽市寺
田大群10の10 新ハイキ
ング園西まで

ング園西まで

期日 3月20日(日) 日知り
集合 J R東山線山崎多田駅前
8時50分
コース J R東山線(車) 中津線
合庁舎(車) 山崎多田駅前
平一栗谷峠(解散)
費用 ガソリン代等諸別り(交
通費各口)
地図 5万1千円
申込み 〒504 岐阜県岐阜市
藤原町1の19の5
見覚まで
* 登山道は、登山者の手で整備
されています。登山者同士は、
お互いに気遣いをお願いします。
登山マナーの方は中津線合庁舎
への集合も可。雨天決行

期日 3月20日(日) 日知り
集合 京都地下鉄北大路駅改札
8時45分
コース 北大路駅(バス) 出雲橋一
種ノ水谷山一山崎多田一
夜泊峠一向山一山崎多田一
西野尻(解散)
費用 約1500円(バス代)
地図 昭文社「40京都市山」
係 ①西野尻
申込み 〒610-0101 城陽市寺
田大群10の10 新ハイキ
ング園西まで

山行報告

(11・12月)

新・イングリッシュ

木曾・南木曾

11月3日(日) 晴れ

JR南木曾駅 8:20 (集合・車)

南木曾登山口 8:40 9:00

コース分岐点 40 南木曾宿 11:00

11月7日(日) 晴れ

JR安曇高原駅 8:40 (バス) 小人

谷越 9:50 10:00

11月10日(日) うち曇り
(奥谷) 谷田林入口 8:35

11月10日(日) 晴れ
(奥谷) 谷田林入口 8:35

11月10日(日) 晴れ
(奥谷) 谷田林入口 8:35

11月17日(日) 晴れ
(奥谷) 谷田林入口 8:35

11月17日(日) 曇りのお晴れ
(奥谷) 谷田林入口 8:35

11月23日(日) 晴れ
(奥谷) 谷田林入口 8:35

11月23日(日) 晴れ
(奥谷) 谷田林入口 8:35

11月17日(日) 晴れ
(奥谷) 谷田林入口 8:35

11月17日(日) 曇りのお晴れ
(奥谷) 谷田林入口 8:35

11月23日(日) 晴れ
(奥谷) 谷田林入口 8:35

11月23日(日) 晴れ
(奥谷) 谷田林入口 8:35

77号(14・40)(解散)

大和ヶ谷秋道が決議のため予定を変更して雨を患防損の無念録(66号)に添り感至を添しんた。大和ヶ谷秋道の日だまりで本年各、各日持参の品々を出し合つて大いに盛り上がった。

〔参加者〕藤村陽彦 小林 睦 森澤元博 森澤道子 大石将英 谷 久雄 奥井宗生 奥田貞雄 池田修造 池田繁美 高杉 博 金谷 昭 山田昌三 鈴木 庸 竹田利夫 高橋 寛 豊田真理子 小林 実 野原信美 則定保夫 山田明男 河辺牧男 ○山本久雄

杉尾不動の635枚の辨段で二年を納めた。
〔参加者〕木島功子 岡田真介 平藤英子 中村健吾 小川孝子 川田久子 松井徳永 千葉幸枝 真田孝子 三木孝子 加藤佳彦 堀 貞明 船越利明 船越みづ子 小林 昇 石田芳弘 山下恒三 山田 豊 井藤正昭 草野智恵子 山本 勉 奥田明子 杉山 浩 关村栄治 木村 晃 高橋 清三 上隆行 岸止裕美 島村正光 湯浅次男 ○岡田 昇 (計32名)

休職して急坂の下山路を一気にくだりお尻にドロのついた人もいた。
〔参加者〕新田孝子 川崎敏子 吉福 澄 上田正子 村上春代 奥田貞雄 堀 久子 加藤佳彦 堀田 寅 入江武史 森川信之 渡辺清郎 三井敏一 三宅 明 山岸隆雄 宮越正明 北尾信枝 宮本真幸 宮本徳子 石田豊夫 藤原英明 徳原勝子 今西光男 金森節子 立川郁夫 井林寿美子 近藤 恭 岩崎宗子 仲秋一郎 仲秋登子 佐賀草一 瀬戸内伸子 戸板 茂 奥比治夫 栗岡克子 城月清幸 杉山久子 郡司善八郎 郡司良江 辻 行子 白根初子 川上久登 武蔵 剛 水木美登里 中村英雄 平 幸子 壁田美奈子 南 寛子 富岡慶子 川西美智子 森原直樹 星野正弘 鈴木大和 秋田博樹 御田信子 宮川幸次郎 青木一雄 西下利和 細井和子 渡辺順一 奥山善三 杉村安茂 古川裕子 多賀久子 今江登幸子 近藤登子 宮坂裕子 和田美智子 林 金子 上坂進雄 中西 昭 中西初子 明神城行 山口健明 佐田次男 神城行 網木美登子 山川光郎 岡 彰 中野知子

金剛・旗塚岳からタンボ山
12月22日(晴) 晴れ
南海千早口駅8・40(集合) 8・50(旗塚岳9・50)10・00(府庁三差路11・15)20(旗塚)11・30(昼食)12・20(十字峠12・30)タンボ山13・30(35)杉尾峠13・50(不動山の巨石14・20)50(初芝高木高校バス停15・30)(解散)15・51(バス)林間国都出駅
初冬の清れた一日。アツプタウンの屋根道を落ち葉を踏みしめ木もれ日の中を歩いた。天見富士と

12月23日(晴) 晴
京極駅八条口5・00(集合) 8・10(バス)安掛10・10(野原谷林道終点11・00)10(峠)12・40(ハサビ山12・10)(昼食)12・55(平尾富士13・40)45(豊原京極場14・10)30(由良川15・40)45(観光センター16・10)16・30(バス)京極駅18・20(解散)
雪の舞う寒い日だったが歩いてみると汗かた。平尾富士の屋根道を展望台に着くとちょうど日が差し、相景が広がった。ゆっくり

益 洋一 甲木幹子 矢野トモ子 奥村洋子 大西 勝 菅原啓久 丸谷順子 武内貴夫 木高美登子 高野道子 坂井 傑 日比正則 竹上輝夫 原田武次 内本忠子 高野恒夫 中井 輝 中井裕子 〔奈良〕 宮崎隆男 藤井洋子 岡本由子 仲 成和 辻園登子 〔和歌山〕 山野 眞一 〔兵庫〕 野添司郎 野田下代子 山田克明 弘中健明 廣 徳治 阪 隆平 馬場 弘 馬場無紀子 善徳勝郎 石丸信太郎 〔広島〕 西村博利 (76名)

本部からのお知らせ
定価改定と年会費の値上げについて
次4月発売の第84号(99年初号・6月号)から本誌の定価を500円(税込)に改定します。それに伴い年会費を3000円(入会金500円)はそのままに値上げします。創刊号は64ページ・450円で発足しましたが、現在は96ページに増加しています。また消費税の引き上げなど諸般の事情もござりますので、会員の皆様にはどうぞ御理解ご了承くださいませ。
今後継続の方は3000円、新入会の方は3500円(夫編で入会の方は4000円)となります。今号に挿入の新しい振替用紙をご使用くださるようお願い申し上げます。
平成9年2月
新ハイ関西(代表)村出智俊

佐藤彰子 木村 晃 ○村出智俊
◎中西信行 (計32名)

新ハイキングクラブ関西
入会のすずめ

このページの山行例会を通じて正しい山歩きを、たのしい山仲間たちと味わいませんか。リーダー(添)はずべて無償の奉仕で、各自で切符を買い茶代を払い、宿泊料もすべてフリーカンです。

あなたも新ハイキングクラブ関西に入会してたのしいお仲間になりませんか。会費には「母守」「新ハイキング別冊関西の山」(年間版)月5号分)をお届けします。会員は山行例会に優先参加できます。入会金 500円(ハッジ代)年会費 3000円(送料共)
新ハイキングクラブ関西への入会申し込みにはこの雑誌に挿入の振替用紙をご利用ください。氏名(ふりがな)及び第何号からの送本かをお忘れずに明記ください。尚、定期購読をご希望される方はお名前になっていただきますと、毎月発売のお手元に届きますので便利です。

山行リーダー募集
リーダーは2か月に1〜2回程度の山行計画を立案し、実施していただきます。
経験のある人や、やってみたいと思われる人は、当会本部(日田)までご連絡ください。
マネーアールを記した小冊子「新ハイ関西・リーダー必携」を送ります。

○新入会費紹介(3180まで)
〔栃木〕 福田朝真
〔東京〕 渡水敦子
〔愛知〕 石川 修 森山信宏
加藤博巳 小山厚春
〔岐阜〕 和田昌子
〔滋賀〕 岡井孝子 菅原敏子
〔三重〕 水谷和子 金原隆男
〔奈良〕 北谷靖朗 武村仁鶴
〔徳島〕 榎本孝之 佐竹 武
佐藤彰子 近藤英夫 橋本 寿
〔京都〕 渡邊孝子 岸本紀子
高橋肇介 高津伸子 吉田美登子
高野初人 井川敏一 井川陽子
吉野節夫 高田紀栄
小島孝子 高田敏子
〔大阪〕 桃田 晃 山越源太郎
古田博士 中井直樹 早土原良一
太田光弘 木村太郎 小寺龍男

訂正とお詫
31号(脱収)46ページ中段5行目「右下の谷に……」は「右下の谷に……」が正しい。
32号(新春)12ページ下段19行目「……」は「……」が正しい。
32号(新春)47ページ上段10行目「のせしべと……」のせしべと……のせしべが見え……」が正しい。
32号(新春)55ページ下段のA

コースタイムは「1047分(30分)背・所(30分)セキオノコバ往復」と、点を差加ください。
32号(新春)57ページ下段2行目「上で2等二角点がある」は「上で1等二角点がある」が正しい。
32号(新春)58ページ中段17行目「101000」は「101125分」が正しい。
32号(新春)62ページの写真の説明中「北側の四つ辻」とは「北西の四つ辻……」が正しい。
32号(新春)90ページ下段城月園遊覧を歩く(京都北山46)の去来日は10月10日印刷でした。
32号(新春)93ページ二段目8行目【奥野】「松本兵夫(兵)は「松下兵夫(兵)が正しい。同ページ四段目「10月20日」の「藤原町・藤原町」はいずれも「藤原市・藤原市」が正しい。(編集者)